

チャガタイ・ウルスとカラウナス＝ニクダリヤーン  
——『歴史集成』「チャガタイ・ハン紀」の再検討——

Ulūs-i Chagatay and Qarā'unās (=Nikūdariyān) :  
Reexamination of “Dāstān-i Chaghatāy Khān” in  
*Jāmi' al-Tawārīkh* by Rashīd al-Dīn

川 本 正 知  
Masatomo KAWAMOTO

**Abstract** In my previous article “Chaghatay Khānate and Qarā'unās”, I discussed a “people” known as the Qarā'unās or Nikūdariyān, that comprised several nomadic tribes who spread across the northern and eastern regions of Afghanistan during the 13th and 14th centuries. I argued that the Qarā'unās (Nikūdariyān) were originally the nomadic armed forces of 2 tūmān whom the second Great khān of Yeke Mongrol Ulus Ögötāy (1229-41), had sent to the border lands of Kashmir and India, the frontier of the region Yeke Mongrol Ulus had conquered before, to form part of the frontier defense force called tamma. I also argued that by the end of the 13th century, the Qarā'unās (Nikūdariyān) became a major portion of the Ulūs-i Chagatay under Chaghatāy khān Dūā (1282/3-1307), and the regions they nomadized were subordinated to the Chaghatāy Khānate (*Study of World History*, vol. 242, Yamakawa Publishing Company, Tokyo, 2015: 1-16 [in Japanese]). However, this work had several unsettled issues that needed to be resolved by producing supporting evidence. Specifically, since a key source of my study which was printed texts of “Dāstān-i Chaghatāy Khān” that is part of Rashīd al-Dīn's (died 1318) *Jāmi' al-Tawārīkh* did not undergo a careful revision of the primary manuscripts before publication of the texts and the accuracy of their statements are doubtful; moreover, there are contradictory statements among the accounts of the text itself.

In the present work, I revised old and new texts of “Dāstān-i Chaghatāy Khān” as well as the manuscripts they used in order to clarify the problems above. I then attempt to revisit the history of the Chaghatay Khānate by re-examining the problematic statements in “Dāstān-i Chaghatāy Khān” and discussing what type of “nation” the Ulūs-i Chagatay and Chaghatay Khānate were in light of this re-examination. Finally, I provide another overview of the dissolution of the nomadic people known as Qarā'unās (Nikūdariyān) and, as before, re-examine the problematic statements in “Dāstān-i Chaghatāy Khān” to remap the process whereby the Qarā'unās (Nikūdariyān) were subsumed into the Ulūs-i Chagatay by the end of the 13th century.

**Keywords** Ulūs-i Chagatay (チャガタイ・ウルス), Chaghatay Khānate (チャガタイ・ハン国), Qarā'unās=Nikūdariyān (カラウナス＝ニクダリヤーン), *Jāmi' al-Tawārīkh* (『歴史集成』), Dāstān-i Chaghatāy Khān (『チャガタイ・ハン紀』)

## は じ め に

本稿の「チャガタイ・ハン」とは、チンギス・ハンの第2子チャガタイ (d. 1242) の子孫たちのうち「チャガタイ・ウルス (Ulūs-i Chaghatāy)」のハン位に即いた者を指し、チャガタイ・ウルスとはチャガタイおよび彼の子孫のチャガタイ・ハンたちに率いられ支配される遊牧民が構成する一つの政治的集団すなわち遊牧民の「国」をさす。また、「チャガタイ・ハン国」という言葉は、英語の Čaghatay Khānate, フランス語の khanat de Čagatai の翻訳であり、この言葉でチャガタイ・ウルスが支配する定住民の住む地域をふくむ領域を備えた「国」をさすことにする。この二つの言葉の意味の相違は、遊牧民と定住民の「国」の概念の相違に基づく。「モンゴル時代」は支配者が遊牧民であったので、現実にはウルスの概念が「国」の形を規定し、人民と領土からなる定住民の「国」の概念は定住民出身の歴史家たちの書いた歴史書に現れるだけである<sup>1)</sup>。

筆者は、13世紀から14世紀にかけて現在のアフガニスタン北部から東部にかけて展開していた複数の遊牧民部族集団からなるカラウナスまたはニクダリヤーン<sup>2)</sup>とよばれる「民族」は、もともと大モンゴル・ウルス2代目オゴタイ・大ハン (大ハン在位 1229-41) によって大モンゴル・ウルスの征服地域の辺境地帯に送られたタンマ tamma とよばれる鎮守軍・辺疆守備隊の一つとしてインド・カシミール辺境に送られた2テュメン tūmān の遊牧民の軍隊であったこと<sup>3)</sup>、13世紀末にはチャガタイ・ハンのドゥア (在位 1282/83-1307) のもとにチャガタイ・ウルスを構成する主要な一部となり、彼らの展開していた地域がチャガタイ・ハン国に属することになったこと、を述べた [川本 2015; 川本 2013: 111-17]。次に14世紀前半のチャガタイ・ウルスの一部としてのカラウナス集団の実態を解明していかねばならないが、前稿 [川本 2015] には解決に論証を要するいくつかの問題が残された。それは、主に根本資料であるラシード・ウッディーン Rashīd al-Dīn (d. 1318) 著『歴史集成 (Jāmi' al-Tawārikh)<sup>4)</sup>』の「チャガタイ・ハン紀 (Dāstān-i Chaghatāy Khān)」の刊本は主要な写本の厳密な校訂をへて出版されたものではないので可能な限り現存する写本を参照しなければ歴史的事実を確定することができないこと、「チャガタイ・ハン紀」の記述の中には互いに矛盾する記事が含まれること、による。

1) ウルスとよばれる遊牧民たちの「国」およびチャガタイ・ウルスもその一部を構成した大モンゴル・ウルス (Yeke Mongyol Ulus) とよばれる遊牧民の「国」については川本 2013: 11-126 (第I部) 参照。

2) この二つの名称については川本 2015: 9-11 参照。

3) タンマの意味、大モンゴル・ウルスの軍隊の中でのタンマ軍の位置づけ、各地に派遣されたタンマ軍の編成、派遣先については川本 2013: 98-111 参照。

4) 本稿では *Jāmi' al-Tawārikh* というアラビア語の書名を『歴史集成』と訳す。日本では『集史』と訳されることが多いが、集史という言葉は「歴史を集めたもの」としての本の書名を表す日本語の造語として不適切である。中国では『史集』と訳されている。

本稿ではまず「チャガタイ・ハン紀」の校訂テキストと写本をとりあげその問題点を指摘する。次に「チャガタイ・ハン紀」の問題のある記述を再検討していくことによって、チャガタイ・ウルス及びチャガタイ・ハン国とはどういった「国」であったのかを論じてチャガタイ・ハン国史の再考を試みる<sup>5)</sup>。つぎに上述タンマがカラウナス＝ニクダリヤーンとよばれる集団に変化していく過程を再度概観したあと、同様な手法でカラウナス＝ニクダリヤーンが13世紀の末にチャガタイ・ウルスに包摂されていくまでの過程を再検討する。

## I 「チャガタイ・ハン紀」再考

### 1 「チャガタイ・ハン紀」テキストとその問題点

『歴史集成』は、第I巻「モンゴル人の歴史」、第II巻「世界諸民族史」、第III巻「世界地誌」からなっていた<sup>6)</sup>。第I巻「モンゴル人の歴史」は、第1部「1. モンゴル・トルコ部族誌、2. チンギス・ハンの歴史」、第2部「チンギス・ハンの後継者たちの歴史」、第3部「イル・ハンたちの歴史」の3部に分けられる。第I巻は、ラシードが亡くなる以前の717年 sha'bān 月(1317年8-9月)にバグダードにおいて書写されたイスタンブル写本(Topkapı Sarayı Müzesi, MS. Rewān Köşkü 1518)を底本に校訂されたロウシャン&ムーサーヴィー・テキスト [JT (Rowshan & Mūsawī)] によって見るできるようになった<sup>7)</sup>。第I巻第3部は14世紀初めに書写されたと考えられるいわゆるタシュケント写本 (Abu

5) 信頼のおけるチャガタイ・ハン国史として、Barthold 1956: 110-37, W. Barthold-[J. A. Boyle], Čaghatay Khān, Čaghatay Khānate, *Elʹ*, vol. II, 1965: 2-4, Peter Jackson, Chaghatayid Dynasty, *Elʹ*, vol. V, 1992: 343-47 がある。

6) 『歴史集成』の資料的価値および1980年代までに出された主な校訂テキストについては本田1991: 570-573 参照。第I巻の校訂テキストとそれらが使っている写本については宇野2011 参照。第II巻の校訂テキストとくに2000年代になって新たにモハンマド・ロウシャンによってつぎつぎと出版された第II巻のテキストについては大塚2016a, 王一丹およびモハンマド・ロウシャンによる第II巻に含まれる「中国史」の2種の校訂テキストについては矢島2008 参照。大塚は、第II巻「世界諸民族史」は、『オルジェイト史』[TU]の著者アブー・アルカーシム・カーシャーニー Abū al-Qāsim 'Abd Allāh b. Muḥammad al-Qāshānī が700 (1300/01)年にガザン・ハン(イル・ハン在位1295-1304)に初版を献上した世界の諸民族を対象とする世界史『歴史精髄 (Zubdat al-Tawārikh)』をラシードがほとんどそのまま引き写したものにすぎず、したがって第II巻の「真の著者」はカーシャーニーであること、ラシードは *Tārīkh-i Mubārak-i Ghāzānī* と名付けてガザン・ハンに献上することになっていた自ら書いた「モンゴル人の歴史」を第I巻とし、カーシャーニーの『歴史精髄』を第II巻、「世界地誌」を第III巻とした3巻からなる編纂本を、これまたカーシャーニーが『歴史精髄』を章ごとに少しずつ編纂し完成した段階でつける予定であった書名の *Jāmi' al-Tawārikh* すなわち『歴史集成』と名付けて1307年にオルジェイト・ハン(在位1304-16)に献上したこと、を論証した [大塚2014: 25-48]。第III巻は今日まで発見されていない。現存70点の『歴史集成』写本リストは大塚(2016a): 58-61にある。『歴史集成』の19世紀ヨーロッパの東洋学までを含む各時代の「伝承と受容の歴史」については大塚2016b 参照。

7) キャリーミーによるテキスト (ed. B. Karīmi, 2 jild, Tehran, 1338) も第I巻全部を含むが、「不良の集成本である」[本田1991: 572] ので本稿では使用しない。

Rayhon Beruni Institute of Oriental Studies, Tashkent, MS. CBP 1620)<sup>8)</sup> とイスタンブル写本の両写本を底本とするアリー・ザーデ・テキスト [JT/III (Али-заде)] が信頼の置けるテキストとして利用されてきた。これに対して「チャガタイ・ハン紀」が含まれる第 I 巻第 2 部は、ロウシャン&ムーサヴィー・テキストが出た 1994 年までは、アリー・ザーデ校訂の「オゴタイ・ハン紀」[JT/II (Али-заде)] を除けばティムール朝時代の 1434 年に書写されたパリ 209 写本 (Bibliothèque Nationale, MS. Supplément Persan 209) を底本としたブロッシェ・テキスト [JT/II (Blochet)] しかない時代が続いてきており、ロウシャン&ムーサヴィー・テキストの出版は特にその第 2 部の読み直しに大いに役に立つはずであった。

しかし、ロウシャン&ムーサヴィー・テキストは、タシュケント写本を参照しておらず、そのみか第 I 巻「モンゴル人の歴史」の諸写本の新たな校訂をしたのではなく、「アリー・ザーデの校訂テキストがある部分についてはそれをそのまま利用し、新たな校訂をしていない」ことが明らかにされた [宇野 2006: 97]。さらに、タシュケント写本とイスタンブル写本を詳細に比較した宇野によればロウシャン&ムーサヴィーが底本にしたイスタンブル写本は書写ミスが多い写本であること、両写本共通の上位写本の書写時における脱落がある可能性があることが指摘されている [宇野 2006: 101-11]。宇野はロウシャン&ムーサヴィーの校訂の数々の問題点を指摘し、彼らのテキストは「校訂としてあまり質の高いものとは言えない」と使用に際しての注意を呼びかけている [宇野 2011: 52, 56-58]。

「チャガタイ・ハン紀」においても、ロウシャン&ムーサヴィー・テキストはイスタンブル写本をブロッシェ・テキストから補っているだけで他の写本を参照した形跡はない<sup>9)</sup>。しかも新テキストとして最も重要な、どの部分が修正され、どの部分が新たに付け加えられたのかはブロッシェ・テキストと綿密に照合してもわからず、結局両テキストが使っている写本をみなければならない。

また、ロウシャン&ムーサヴィー・テキスト出版後、日本の研究者によって、『歴史集成』第 I 巻の原本は一つではないことが明らかにされた。第 I 巻には「初版」と「増補版」という二つのバージョンの存在が明らかにされ、この二つのバージョンの相違を校訂本では

8) タシュケント写本は、書写年代は不明だが、イスタンブル写本とほぼ同時期に作成されたと考えられる。タシュケント写本とイスタンブル写本は外形から内容の細部まで酷似している。「チャガタイ・ハン紀」では、イスタンブル写本: 168a-175a; タシュケント写本: 139a-145a とも 7 葉半に書かれ、1 頁 29 行の一行の文字数もほとんど同じで全ての葉の表・裏は全て同じ言葉ではじまって同じ言葉で終わっており、ロウシャン&ムーサヴィー・テキストでは省略されている系図 (jadwal) の線や人名の頁中の配置もほとんど同じである。この二つの写本は同一の写本または同一の元となる写本から写された写本から書写された 2 写本であることは明らかである。ただ、タシュケント写本からはイスタンブル写本の 170 葉にあたる b 面に系図が書かれた一葉 (141b と 141a の間) が失われている。

9) 宇野に拠れば「チンギス・ハン紀を見てみると、ロウシャンらは、トプカプ 1518 (本稿のイスタンブル写本) とキャリアミーのテキストを比較し、トプカプ 1518 の脱文を補っているようである」! [宇野 2011: 52]。

どのように扱うべきかという問題が新たに浮上したのである。

『歴史集成』の写本は、1307年4月17日にオルジェイトに献呈された3巻本を元本とする「初版」系統写本群と1309年8月までに完成していたと考えられる『ラシード著作全集』に収められ、その間に内容も修正・増補されたとされる4巻本を元本とする「増補版」系統写本群に分けられる〔岩武1994；岩武1997；白岩1993；白岩1998；宇野2003；宇野2006：97-101，大塚2016b：74-75〕<sup>10)</sup>。イスタンブル写本とタシュケント写本は第I巻が一旦完成した後に増補が段階的に繰り返された増補版系統写本に属している<sup>11)</sup>。これに対してブロッシェによる第I巻第2部の校訂本が底本にしたパリ209写本は初版系統写本に属する〔宇野2011：47〕。第2部に関して、ブロッシェ・テキストは初版の、ロウシャン&ムーサーヴィー・テキストは増補版の校訂テキストとして利用できそうであるが事態はそう簡単ではない。宇野の指摘する初版本に対する「ティムール朝時代の加筆」を考慮にいれなければならないからである。

増補版は3写本ともに14世紀の初めに書写されたのであるからティムール朝における修正・改変を考える必要はないが、パリ209写本は、1434年にティムール朝第3代君主シャー・ルフ（在位1409-47）に献呈された写本であり〔大塚2016：58〕、それゆえ〔ブロッシェ・テキストは〕ティムール朝時代の加筆が含まれたテキストであるという点に注意する必要がある〔宇野2011：48-49〕。つまりブロッシェ・テキストが使っている写本は初版そのものを忠実に写した写本ではない。しかも、とくに「チャガタイ・ハン紀」に関しては、ティムール朝はチャガタイ・ハン国の直接の後継王朝であるから、そこで改変されたり書加えられたり削除されたりした内容は15世紀までに新たに発見された事実や中央アジアのモンゴル人たちが語り伝えてきた伝承を反映している可能性があるのである。

以上のことを前提としてまず「チャガタイ・ハン紀」の写本および二つのヴァージョンの問題を再検討しよう<sup>12)</sup>。

## 2 チャガタイの息子の数とその順番の考察から導かれる「チャガタイ・ハン紀」の三つのヴァージョン

JT (Rowshan & Mūsawi) : 751-61 および増補版系統写本はすべてチャガタイには6人の息子がいたとし、①ムワトゥケン Muwātūkān ②モチ・イエベ Mūchī Yibe ③ベルゲシ

10) 第IV巻として系譜集が付けられ、それがトプカプ宮殿所蔵の『五族譜 (*Shu'ab-i Panjgāna*)』〔ShP〕またはその元となった写本と考えられている。確かにこの系譜集のチャガタイ・ハンの息子の数は6人で、その順番も増補版系統の写本に一致する〔Quinn 1989 : 234〕。この系譜集については本田1991 : 29-33を参照。

11) 増補版としてイスタンブル写本、タシュケント写本のほかに14世紀中に写されたとされるロンドン16688写本 (British Library, Ms. Or. Add. 16688) が発見された〔宇野2011 : 47 ; 宇野2012 : 174 ; 大塚2016a : 58〕。

12) 使用した『歴史集成』「チャガタイ・ハン紀」写本の略号はまとめて本稿の末尾につけた。

Bilgashī ④サルバン Sārbān ⑤イエス・モンケ Yisū Mūngkā ⑥バイダル Baydār の順としている。

初版系統写本はすべて 8 人の息子がいたとするがその順番は異なる。

JT/II (Blochet): 155-164 およびパリ 209 写本: 210a-213a; パリ 1113 写本: 156a-57b; サントペテルブルク D66 写本: 198b-202a では, ①モチ・イエベ ②ムワトゥケン ③ベルゲシ ④サルバン ⑤イエス・モンケ ⑥バイダル ⑦カダカイ Qadāqay ⑧バイジュ Bāyjū となっている。③から⑥までは増補版と同じである。

これに対して同じく初版本系統写本とされるサントペテルブルク PNS46 写本: 191a-193a: ランプル写本: 46-51; イスタンプル 282 写本<sup>13)</sup>: 408a-409b; ミュンヘン写本: 248a-251b では, ①モチ・イエベ ②ムワトゥケン ③イエス・モンケ ④ベルゲシ ⑤バイジュ ⑥バイダル ⑦カダカイ ⑧サルバンとなっている [宇野 2012: 175-77]。

増補版はムワトゥケンを長子にして次子をモチ・イエベにする。初版系統写本はすべてモチ・イエベを長子にしてムワトゥケンを次子とすること, バイダルを 6 番目, カダカイを 7 番目の息子とすること, が共通である。

初版の元本には 8 人の息子が書かれていたが, 増補版の編者は後述する初版本の内部矛盾箇所を見いだしたことによりその数を 6 人に削減したのである。問題は初版系統写本群のブロッシェ・テキストを含むパリ 209 写本, パリ 1113 写本, サントペテルブルク写本 D66 の息子たちの順番とサントペテルブルク PNS46 写本, ランプル写本, イスタンプル 282 写本, ミュンヘン写本の息子たちの順番の相違である。

チャガタイの長子または次子のムワトゥケンの息子たちに関して, 増補版系統写本では 4 人の息子がいるとされ ①バイジュ Bāyjū ②ブリ Buri ③イエスン・トゥウ Yisūn Tūā ④カラ・フラグ Qara Hūlagū の順で書かれている。初版系統写本のうちパリ 209 写本: 210b-212b; サントペテルブルク D66 写本: 199a-200b および JT/II (Blochet): 162 は増補版と同じである。しかし, 初版系統写本のうちサントペテルブルク PNS46 写本: 191b-192b; ランプル写本: 47-51; イスタンプル 282 写本: 408a-409a; ミュンヘン写本: 249b-251b ではムワトゥケンの息子の数は 3 人で ①カラ・フラグ ②イエスン・トゥウ ③ブリの順で書かれ, バイジュが消え順番も逆になっている。

この初版系統写本の二つのセットのうちどちらが献呈された初版の原本にちかひものだろうか。

増補版の元となった写本の編者が, チャガタイの息子たちを 6 人としてその子孫について

13) イスタンプル 282 写本は, 1417/8 年にティムール朝第三代君主シャー・ルフの命令で編纂されたハーフェズ・アブラーの『撰集 (Majmū'a)』のシャー・ルフに献呈された現在最古の写本であり, バルアミー著『タバリイ史翻訳』, ニザーム・シャミー著『勝利の書』とともに『歴史集成』(第 I 巻・第 II 巻合本)を含む。ハーフェズ・アブラーの『撰集』およびこの写本については大塚 2015: 254-257 参照。

も改変したり増補を追加したのは「チャガタイ・ハン紀」第1章の系譜の部分だけであり、第2章では第1章で自らが行っている改変や増補の追加をまったく考慮することなく初版の息子たちの数や順番をそのまま写してしまっている。

たとえば第2章末の「チャガタイの7番目の息子であるカダカイの息子のブカ・テムル」[JT (Rowshan & Mūsawī) : 773] との記述は増補版系統、初版系統を問わず写本全てに現れる。

また、全ての写本に「カラ・フラグが、チャガタイの年長の息子ムワトゥケンの息子たちの中で最年長者であり、——中略——後継者であったにもかかわらず、グユク・大ハンは、チャガタイの3番目の息子のイエス・モンケを、彼がモンケ・大ハンと対立していたという理由でチャガタイ・ウルスの王位に送った」[JT (Rowshan & Mūsawī) : 768 ; 宇野 2012 : 178-80] とある。

同じく「モンケ・大ハンが亡くなった時、クビライ・大ハンはムワトゥケンの3番目の息子のブリの年長の息子であったアビシュカ Abīshqa を、[カラ・フラグの妃であった] オルキナ・ハトゥン Orqina Khātūn を娶って、カラ・フラグの地位を継承しチャガタイ・ウルスの支配者になるために送った」[JT (Rowshan & Mūsawī) : 768]。

「[クビライ] 大ハンは、ムワトゥケンの2番目の息子であるイエスン・トゥウの息子であり、長い間彼(大ハン)のもとに仕えていたバラクをチャガタイ・ウルスに送った」[JT (Rowshan & Mūsawī) : 769]。

チャガタイの7番目の息子がカダカイ、3番目の息子がイエス・モンケ、ムワトゥケンの息子たちが ①カラ・フラグ ②イエスン・トゥウ ③ブリとなっている写本はサンクトペテルブルク PNS46 写本、ランブル写本、イスタンブル 282 写本、ミュンヘン写本である。

また、サンクトペテルブルク PNS46 写本 : 192b ; ランブル写本 : 50 ; イスタンブル 282 写本 : 409a ; ミュンヘン写本 : 251a ではムワトゥケンの3番目の息子の「ブリの子は2人」とされアビシュカとアジキ Ajiqī しかあげられていない。しかし増補版を含むその他の写本と JT/II (Blochet) : 164-65 ; JT (Rowshan & Mūsawī) : 753-54 では息子は5人とされ上記4写本のアビシュカとアジキの説明に残りの3人分の説明が付け加わっている。

以上の考察から、献上された初版の原本に最も近いのはサンクトペテルブルク PNS46 写本、ランブル写本、イスタンブル 282 写本、ミュンヘン写本であることが明らかになった。初版の原本には、チャガタイの8人の息子が ①モチ・イエベ ②ムワトゥケン ③イエス・モンケ ④ベルゲシ ⑤バイジュ ⑥バイダル ⑦カダカイ ⑧サルバンの順で書かれ、ムワトゥケンの息子は3人だけ、ムワトゥケンの息子ブリの息子は2人だけが書かれていた。

また、増補版の元本は、初版をもとに修正や改変や増補を書き加えていった際に何らかの理由で初版のモチ・イエベとムワトゥケンをいれかえている。宇野 2012 : 183 はモチ・イエベがオールドに仕えていた女奴隷に生まれた子であり、ムワトゥケンがチャガタイの第一ハ

トゥンから生まれた長子であったからであろうと推測している。

モチ・イエベに関して、増補版写本〔イスタンブル写本：170a；ロンドン 16688 写本：11a, JT (Rowshan & Mūsawī) : 759<sup>14)</sup>〕は彼を「チャガタイの第2番目の息子」とし、初版系写本のうちパリ 209 写本：210a；サンクトペテルブルク D66 写本：198b；パリ 1113 写本：156b の3写本および JT/II (Blochet) : 158-61 は「チャガタイの第1番目の息子」とするが、両写本群ともそれに続けて次のような文章が入っている。

このモチ・イエベの母はイエスルン・ハトゥン Yīsūlūn Khātūn のオールドの女奴隷 (kanizak) であった。ある夜ハトゥンが外出していた時、彼女が寝間着を用意していた。チャガタイは彼女を引き寄せ妊娠させた。この理由によりチャガタイは彼をあまり信頼しておらず、彼には軍隊と支配領域 (lashkar wa wilāyat) を〔他の子供たちよりも〕少ししか与えなかった。彼 (モチ・イエベ) には11人の息子が次のような順番でいた。  
[JT (Rowshan & Mūsawī) : 759]

これに続けてロンドン 16688 写本：11a では11人の息子とその子供たちの名があがる。イスタンブル写本および JT (Rowshan & Mūsawī) ではそこに8人の息子とその子供たちの名しかあげていないが、イスタンブル写本：171a；タシュケント写本：142b の系図にはロンドン 16688 写本と同じ11人の息子が①テケシュ Tākishi<sup>15)</sup> ②テギュデル Tegüdir ③アフマド Aḥmad ④テムデル Temüder — ⑨トガン Tūghān — ⑪ノム・クリ Nom-Quli の順であがっている。増補版3写本は名を記すのみである。

一方、初版系統写本群のうちパリ 209 写本：210a；サンクトペテルブルク D66 写本：198b；パリ 1113 写本：156b および JT/II (Blochet) : 164-66 では増補版写本群と同じく息子11人とし、①テギュデル ②アフマド ③テケシュ ④ノム・クリ — ⑪トガンという増補版とは異なる順で11人の息子とその子供たちの名をあげ、テギュデルとアフマドについては比較的詳しく2人が亡くなった事情が述べられる。また、この写本群では息子たちに1から11までの序数詞がつけられている。

これに対してすでに最も初版に近いと推定した写本群〔サンクトペテルブルク PNS46 写本：191a；イスタンブル 282 写本：408a；ミュンヘン写本：249〕には、そもそも上記引用の文章はなく、モチ・イエベの名前に続けて「彼には次の順序で2人の息子がいる」として①テギュデルと②アフマドのみがあげられ、それぞれにプロッシェ・テキストと同じ説明が入る。また、ランプル写本：48には上の引用文が書かれてはいるが、モチ・イエベの名称を書き入れた欄の下半分にこの写本に時に現れる欄外の書き込みと同じ大きさの小さな黒文字で3行にわたって窮屈に書かれ、テギュデルとアフマドのみあげられて、それぞれプロッシェ・テキストとおなじ説明がある。ランプル写本では、「彼には次の順序で2人の息

14) タシュケント写本には当該部分は一葉ごと抜けている。

15) JT (Rowshan & Mūsawī) : 759 では、イスタンブル写本とロンドン 16688 写本にあるテケシュの3人の息子のウマル以外のモバーラク・シャーとスカトゥ Sūqātū の名が抜けている。

子がいる」と書かれるべきところに、写本が完成して後に上記引用の文が増補版を見て書き入れられたのである<sup>16)</sup>。モチ・イエベの息子の数は初版元本の2人から増補版の11人に増え、さらに増補版ではモチ・イエベがオールドの奴隷の子であることが書き加えられてチャガタイの2番目の息子にされた。

パリ 209 写本、サンクトペテルブルク D66 写本、パリ 1113 写本では、モチ・イエベが奴隷の子であるという増補版と同じ文章とともに増補版とは順序の異なる彼の息子 11 人の名が何らかの情報をもとに書き入れられた。しかし、チャガタイの子供たちの順序としては、ムフトゥケンを第1番目の息子としモチ・イエベをチャガタイの2番目の息子と改変した増補版には従っておらず、①テギユデルと②アフマドの順序も、増補版にはない二人の説明もすでに最も初版に近いと推定した写本群と同じである。

この初版系統写本間の相違はなにによるものであろうか。パリ 1113 写本、パリ 209 写本、サンクトペテルブルク D66 写本は明らかに増補版の「チャガタイ・ハン紀」を見てその内容を初版を書写する際に取り入れている。それだけではなく増補版にない記述も付け加えられている。これが宇野の「ティムール朝時代の加筆」であると推定される<sup>17)</sup>。

ラシードの「チャガタイ・ハン紀」には、それぞれ異なる「初版」(サンクトペテルブルク PNS46 写本、ランプル写本、イスタンブル 282 写本、ミュンヘン写本)、「増補版」(イスタンブル写本、タシュケント写本、ロンドン 16688 写本)、「ティムール朝時代の改訂版」(パリ 1113 写本、パリ 209 写本、サンクトペテルブルク D66 写本、JT/II (Blochet) : 152-197) の3つのヴァージョンが存在することが明らかになった。しかし、ロウシャン&ムーサヴィー・テキストはプロッシュェ・テキストによって増補版をおきながら3つのどのバージョンも正確に反映しておらず、とくに初版を参照しようとする場合には再度写本に当たり直さなければならない。

また、どの写本系統に書かれている事柄が歴史的事実に最も近いかは、ほかの資料との比較によって確認しなければならない。チャガタイの息子の順番については同時代史料がある。

14 世紀の初めにジャマール・カルシー Jamāl al-Qarshī として知られる Abū al-Faql b. Muḥammad が書いたアラビア語の『辞典『スラーフ』への補遺 (*Mulḥaqāt bi al-Surāḥ*)』という同時代の中央アジアで書かれた唯一の歴史的著作が伝えられている<sup>18)</sup>。チャガタイの

16) 写真製本版では欄外の書き込みは印刷されていないが、筆者は2016年8月12日～19日の間ランプルのラザー・ライブラリーを訪れ当写本を詳細に調査し、欄外の書き込みを確認したので、この部分の文字と欄外の書き込みが同じであると結論づけることができた。

17) この変化がティムール朝以前に起こった変化の可能性はないということを判定するためには、少なくとも14世紀末までに書写された『歴史集成』第I巻の全ての写本の「チャガタイ・ハン紀」を比較検討する必要があるが、筆者はそれをまだ行っていない。

18) この著作の史料的价值については Barthold 1928: 51-52 参照。従来ジャマール・カルシーの著作はバルトリドの部分的校訂 [MŞ (Баргольд)] でしか見ることができなかったのだが、新たに発見された写本をもとに新出写本のファクシミリとアラビア語テキストとロシア語訳からなる新たな刊本 [MŞ (2005)] がガザフスタンで出版され全体に目を通すことができるようになった。

息子たちに言及した部分で、「彼の息子たちで知られているのはムアトゥケン、イエス〔・モンケ〕、バイダル、サルバンである」と4人の息子の名をこの順番であげている [MS (2005) : tex. CLXXI]。この順番に完全に合致しているのは初版本系統写本群（サントペテルブルク PNS46 写本，ランブル写本，イスタンブル 282 写本，ミュンヘン写本）である。息子の数はともかくとして，この写本群にかかっている息子たちの順番が最も事実に近いのではないかと推定される。

以上の論証・考察によって，「チャガタイ・ハン紀」は，献呈された初版本にはどのように書かれていたか，増補版はどのように書かれていたか，増補版も見たティムール朝時代の改訂によって初版本はどのように変わったのかをあきらかにし，それぞれのテキストを確定することが可能になった。しかし，3種類のテキストが異なる場合そのどれが歴史的「事実」をあらわしているかどうかを判断することは難しい。可能であるとすれば，上に例示したようにそれぞれのテキストの相違する部分を確定させた後に，それを他資料と比較・対照し最も妥当な仮説を導き出すことであろう。また，初版系統写本，増補版系統写本，ティムール朝時代改訂版系写本の記述の相違だけでなく，同じ事件をあつかうラシードの複数の記述に相互矛盾があることにも注意する必要がある。

## II チャガタイ・ウルス史再考

### I 「チャガタイ・ハン紀」のチャガタイ・ウルスの領域とユルト

チャガタイ・ウルスのはじまりについて，増補版系写本は一致してチャガタイ・ハン紀第2章の初めの部分に次のよう述べている。

و به وقت آنکه لشکرها بخش می کرد چهار هزار مرد به موجبی که در داستان او در فصل قسمت لشکر مفصل نوشته شد به وی داد؛ و از امرا قراچار از قوم برولاس و مونگکه پدر بیسور نویان از قوم جلایر و از ولایات یورتها از موضع آلتای که یورت اقوام نایمان بوده [تا کناره جیحون به وی حواله فرمود]

[チンギス・ハンが軍隊を親族たちに] 分配した時，彼（チンギス・ハン）の物語（*dāstān*）の中の軍隊の分配（*qismat-i lashkar*）の章で述べられていたように，4千の人間（*mard*）を彼（チャガタイ）に与えた。アミールたちからは，バルラス部族に属していたカラチャルとジャライル部族に属していたイエスル・ノヤンの父のモンケを<sup>19)</sup>，諸支配領域（*wilāyāt*）からは，ナイマンの諸部族のユルトがあったアルタイの地から [ジャイフーン川辺までの] ユルト（複数）を [彼に与えた (*be-vey ḥawālat farmūd*)]

19) 系譜集『ムイッズ・アンサーブ』では，そのほかのアミールとして，ジャライル部族のクシュク・ノヤン *Kūshūq Noyan*，ソニト *Sōnit* 部族の小チャガタイ (*Chagahtay Kūchek*)，スルドウス *Suldūs* 部族のキシユリク *Qishliq* があげられている [MASHSM: 28b-29a; Barthold 1928: 468, 499-500, ]。

[JT (Rowshan & Mūsawī): 763; イスタンブル写本: 172a; タシュケント写本: 142a; ロンドン 16688: 13b]。

初版系統写本群 [サンクトペテルブルク PNS46 写本: 193b; イスタンブル 282 写本: 409b; ミュンヘン写本: 251b]<sup>20)</sup> では 2 行目の wilāyāt と yūrt-hā の間に wa が入っている (از ولايات و يورتها)。

ティムール朝時代の改訂版 [JT/II (Blochet): 178-79; パリ 209 写本: 213b; サンクトペテルブルク D66 写本: 202a] では同じく wilāyāt と yūrt-hā の間には wa が入っているが、上記引用テキストと訳で [ ] でつつんだ部分がなく、最後の文章の動詞がない。前の文章の「4千の人間を与えた」があるので後ろの部分も「彼に与えた」と考えることができるが、「ジャイフーン川辺までの」という文章もなくなっている。ティムール朝時代の改訂版から [ ] の部分がなぜ失われているのかは不明であるが、写し漏らしの可能性が高い<sup>21)</sup>。

初版と増補版の違いは wilāyāt と yūrt-hā の間の wa の有無である。wa が入ると、「諸支配領域とユルトの一部を [与えた]」となるが、前半部分は「アミールたちの中からは、——を」となっているから、後半部の az を「一部」として「与える」の目的語として読むことが妥当であるかどうかはわからない。また、yūrt-hā のあとの az——tā (「(アルタイの地) から (ジャイフーン川辺) まで」) が、yūrt-hā にかかっているのか wilāyāt と yūrt-hā 両方にかかっているのかもよくわからない。これに対して、増補版では、文章前半の「アミールたちからは (az umarā), ——を」と後半の「諸支配領域からは (az wilāyāt), ユルトを」は対になって最後の「与える」という動詞の目的語になっていきわめて自然に読める。増補版は初版の文章から wa を取って修正し文章を読みやすくしたのでありきわめて妥当な訂正を行ったものと思われる。

## 2 チャガタイ・ハン国の「支配領域」

チャガタイに軍隊が分配された大モンゴル・ウルス期初期のチンギス・ハン (大ハン在位 1206-27) 時代においては、遊牧民の集団としてウルスが生きていくために必要な遊牧地すなわちユルトが与えられ、定住民的発想からでてくる徴税可能な支配領域を王侯・臣下に与えるというような考え方はなかったという点においても増補版の修正は極めて妥当である<sup>22)</sup>。

20) ランプル写本では、pp. 52-53 間にあったこの部分を含む一葉が抜けている。

21) 佐口 1942: 105 は、この部分を要約して「チンギス・カンがチャガタイに四千戸の遊牧民=戦士を分配した時同時にナイマン地方でユルトを与えた」とし、杉山 1978: 23 は、引用後半部分を、[チンギス・ハンはチャガタイに]「ナイマン部族の遊牧地 yūrt であったアルタイ地方の國土 vilāyāt va yūrt-hā の一部を與えた」と訳し、「ここにいう舊ナイマン領の「アルタイ地方の國土の一部」がチャガタイの初分封地を意味していることはうたがいを容れない」とするが、いずれもブロッシェ・テキストしか参照しなかったことによる誤りである。

22) 引用文中のチンギス・ハンの物語の中の軍隊の分配の章およびチンギス・ハンによる弟たちと息子たちへの遊牧民の集団とそのユルトがあたえられることによってウルスが形成されたことについては川本 2013: 64-87 参照。

征服・支配した領域の中にある遊牧に適した地がユルトとして与えられたと解釈されたのであろう。

また、引用文は、『歴史集成』より40年ほど前に書かれたジュヴァイニー『世界征服者の歴史』の記述をふまえて書かれているように思われる。

[チンギス・ハン]は、チャガタイには、ウイグル諸国の辺疆地 (ḥudūd-i bilād-i Uyghūr) からサマルカンドとブハラまでを与えた。彼の居住地 (maqām) はアルマリク Almāligh の近くのクヤス Quyās であった。[TJ (tx. 1) : 31; TJ (Boyle) : 42-43] マー・ワラー・アンナフルとトゥルキスタンの諸国 (bilād) が征服され支配されるようになった時、彼 (チャガタイ) と彼の息子たちと軍隊の宿営地は、サマルカンドからビシュバリクの辺 (kenāre-yi Bīsh Baligh) までの王の居住にふさわしい快適な場所にあった。彼の春と夏の駐営地はアルマリクとクヤスである。[TJ (tx. 1) : 226-27; TJ (Boyle) : 271]

ジュバイニーは、チャガタイがチンギス・ハンから軍隊と共に与えられたユルトはアルマリクが位置するテンシャン山脈北のイリ川溪谷にあったと明確に書いている [Barthold 1956 : 112-13; 川本 2013 : 75-77]。一方、チャガタイ・ハン国の「支配領域」は「ウイグル諸国の辺疆地からサマルカンドとブハラまで」がチンギス・ハンによって与えられたかのように書かれてはいるが曖昧で漠然としていて「勢力範囲」程度の認識である。これがおそらくラシードの「諸支配領域 [の中] からは、ナイマンの諸部族のユルトがあったアルタイの地からジャイフーン川辺までのユルト (複数) をあたえた」の「支配領域」という言葉の根拠となっている。大モンゴル・ウルス構成期に王侯や諸侯に与えられたのはユルトであって「支配領域」は与えられてはおらず、それは後の定住民出身の歴史家の誤った推定である。

ワッサーフは、ラシードが『歴史集成』をオルジェイトに献上した5年後の1312年に同じ君主に通称『ワッサーフ史』全4巻を献げた<sup>23)</sup>。その第4巻においてはチャガタイ「王国の領域 ('arṣa-yi mamlakat)」は、「マー・ワラー・アンナフル、ホタン Khotan, カーシュガル, ビシュバリク, カヤリクの辺境 (ḥudūd-i Qayāliq) まで」となっている [TW : 580; TTW : 314]。後にワッサーフ自身が1328年までの記事を補足して書き加えた第5巻では、チンギス・ハンが彼を任命したのは、「マー・ワラー・アンナフルの王国, ホタン, カーシュガル, ビシュバリクの辺境, クヤス, カラコルム地方 (nawāḥi-yi Qarāqurm) まで」と書かれている [TW : 607; TTW : 335]。これらの記述は1312年および1328年の時点でワッサーフがチャガタイ・ハン国の支配領域であると考えていた地域を書いたものである。

このうちビシュバリクについては、ラシードも、オゴタイ・大ハン時代のチャガタイは「チンギス・ハンが彼に与えたウルスと軍隊を、ビシュバリクの辺境において支配し、自らの王国の王権の王座において確固たる地位を保った [JT (Rowshan & Mūsawi) : 766]」と

23) 『ワッサーフ史』については本田 1991 : 574-75 参照。

して、チャガタイの本拠地の一つとされている。

『ワッサーフ史』の4巻と5巻のカヤリクとクヤスとの相違については、『歴史集成』増補版系写本において、オゴタイ・ハン即位のクリルタイにおいて、「クナス Qunās からは、チャガタイが全ての子供たちと共に〔来た〕」となっているが [JT/II (Али-заде): 49], 初版系統写本 [JT/II (Blochet): 15] では「カヤリクからは」になっている。増補版の編者は初版のカヤリクではなくアルマリクの近くのカナスまたはクヤスがチャガタイ・ウルスのユルトであると正しく認識してそれを増補版で修正したのであろう<sup>24)</sup>。ワッサーフも後になって増補版を見て修正したのかもしれない。

ワッサーフのどちらの「領域」にもホタン、カーシュガルがはいっているのはワッサーフが独自に得た情報によるものであろう。

チャガタイ・ハン国の領域といっても、モンケ・大ハンの時代までは帝国としての大モンゴル・ウルスの支配領域のなかで、チャガタイ・ハン国の領域がそれとして明確に意識される必要はなく、モンケ・大ハンの死後の内戦によって大モンゴル・ウルスの解体が始まった時点においてもチャガタイ・ハン国としての明確な領域は存在しなかった<sup>25)</sup>。しかし、帝国の解体にともなってジョチ・ウルス、オゴタイ・ウルス、大元ウルス、フラグ・ウルスとの抗争・戦争によってじょじょに勢力圏が確定し、14世紀のはじめにその範囲が領域として認識されていった。ワッサーフの記述の具体性はそれをあらわしている。

### 3 「領域」内にある定住民地域

上の引用にあるサマルカンド、ブハラを含むマー・ワラー・アンナフル、ウイグル諸国、ホタン、カーシュガルなどは、定住民による農耕が大規模に行われる大オアシスである。筆者は、すでに、征服された河北の民と同様、中央アジアのオアシスの定住民も人口調査により十、百、千、万に分けられ各王家に分け与えられたこと、河北と同様にそれぞれの王家の王侯、王妃、諸侯たちはガルガを派遣して分け与えられた集団を監督・管理させていたこと、これらのオアシスを含む中央アジアの定住民地域は大モンゴル・ウルス直轄領として大ハン直属のマフムード・ヤラワチ、マスウード・ベグ親子の中央アジア総督によって管理され1269年の「タラスのクリルタイ」以降もモンケ・大ハン以来の総督マスウード・ベグがカイドゥの名によってマー・ワラー・アンナフルの定住民を統治していたこと、をあきらかにした [川本 2013: 146-47, 153-55, 182-92]。以下の二つの記述によりこの論証の補強をおこなう。

〔バイダルの息子アルグ (チャガタイ・ハン在位 1261-66) がアリク・ブカによってチャガタイ・ウルスに送り込まれた時〕アルグ Alghū は、ネグユベイ・オグル Nigubay

24) アルマリク、カヤリクの位置については Bregel 2003: 37, 39 の地図, TJ (Boyle): vol. 1, Map 1 参照。クヤスまたはクナスの正確な位置はわからないが、「アルマリクの近く」またはアルマリクと並べて夏営地とされていることからイリ川流域のクルジャ地方にあると考えられる。

25) 大モンゴル・ウルスの解体と内戦については, Jackson 1978; 川本 2013: 12-21 参照。

Oghul を、5,000 人の騎兵、彼のアミールのウチャチャル Ūchāchār という名の者、ピチクチのハバシュ・アミードの息子のスレイマン・ベク、ヤルグチ Yārghūchi<sup>26)</sup> のアビシユカという名の者と共に、サマルカンド、ブハラすなわちマー・ワラー・アンナフル諸地方にその方面の境界を守備し、アルグの命令を実行するために派遣した。彼らはそこに到着すると、〔ジョチ・ウルスのハンの〕ベルケに属する者たち (muta'alliqān) と彼らの従者たち (nūkarān) を殺した。—— 中略 —— そして、その集団の財産全てを有無を言わず没収し、そのうちの貴重な物をネギユバイ・オグルにおくった。それからウチャチャルはホラズムに向かった。[JT (Rowshan & Mūsawī) : 882]

〔大元ウルスの大ハン、クビライによって中央アジアに送り込まれた〕バラクは、その後大ハンに敵対した。アバガ・ハンにも同様に敵対した。そして、その諸地方で彼らに所属する者たち (muta'alliqān) を捕らえ、〔彼らの管理する財の〕没収を行った。専制と圧政を人民にたいして始め、その地方を荒廃させた。そして、アム川を渡って、アバガ・ハンと戦うことをカイドウに相談した。[JT (Rowshan & Mūsawī) : 755]

ここにてでくる muta'alliqān とはジョチ家、トゥルイ家が分け与えられていた定住民の集団を監督・管理させるために中央アジアに派遣していたダルガたちであろう。彼らの派遣していたダルガを排除することによって、チャガタイ・ハンのアルグは大ハン直属の中央アジア総督の監督の下にその存在が保障されていたジョチ家の私有財産に、バラクはトゥルイ家の私有財産に手を付け没収しようとした。そして、このことが、大モンゴル・ウルスの定住民地域支配の基本的原則、すなわち財産としての民の大ハンによる公平な分配と一族による共同統治の原則をくずし、帝国の解体を引き起こす内戦の原因の一つとなった。

#### 4 チャガタイ・ウルスのユルト

1250 年代まではチャガタイ・ハンとよばれるチャガタイの後継者のユルトはイリ川溪谷にあった。1253～54 年の冬、西征軍を率いるフラグはアルマリク地方を通過したが、そこでウルグ・エフ ulugh-ef とよばれたチャガタイ家の夫人たちと亡くなったカラ・フラグ (在位 1242-46) の妃で当時チャガタイ・ウルスの監国であったオルキナ・ハトゥンが彼を迎えている [TJ (tx. 3) : 97; TJ (Boyle) : 612]。

チャガタイの息子のモチ・イエベについて「〔彼がオールドの女奴隷から生まれたことによりチャガタイは〕彼には軍隊と支配領域 (lashkar wa wilāyat) を〔他の子供たちよりも〕少ししか与えなかった」とあることからわかるとおり、チャガタイは自らの後継者のチャガタイ・ハン以外のチャガタイ家の王たちにも、遊牧民の軍隊とユルトを分け与えていた。しかし、チャガタイが息子たちに具体的にどこにユルトを与えたかについては次のワッサーフの記述しかない。

26) ヤルグチまたはジャルグチについては川本 2013: 142 参照。

1266年大元ウルスのクビライによって中央アジアに送り込まれたバラクはチャガタイ・ハンのモバーラク・シャーに対して「私は、ウルスと家 (khāna) からしばらく離れておりましたので、私の民は散り散りになってしまいました。お許しを得て、そこに行つて人馬 (ilakhta)<sup>27)</sup>を集めてあなた様と共に遊牧したいと願っております」ととり入り、その後チャガタイ・ハン位を篡奪した [JT (Rowshan & Mūsawī): 769]。ワッサーフは、このバラクのウルスのユルトについて「[チャガタイの長子ムワトゥケンの息子である] チャガタイの孫のイエスン・トゥウの [3人の] 息子のバラクとヤサウル Yas'ur とムミン Mu'min は、チャガーニヤーン地方 (ḥudūd-i Chaghāniyān) に定められたユルトを持っていた」 [TW: 67; TTW: 46] と述べ、イエスン・トゥウ家のユルトが現在のウズベキスタンのスルハン・ダリア州のスルハン川流域にあったことを伝えている。チャガーニヤーンは現在のデナウ Denaw である [Barthold 1928: 72-73]。

チャガタイ・ハンのユルトは、モンケ・大ハンの死の翌年 1260年、開平府 (後の上都) およびモンゴリアで相次いで大ハンに即位したモンケの弟クビライとアリク・ブカの間で大ハン位をめぐる戦争が勃発して以降イリ川の渓谷にはなかった。

クビライに対抗して大ハンに即位したアリク・ブカはチャガタイ・ウルスを自らの味方につけるために、チャガタイの6番目の息子バイダルの子のアルグをハンとして中央アジアに送り込んだ。その後アルグがアリク・ブカを裏切るとアリク・ブカは 1263年にアルグを打ち破りイリ川渓谷に進駐した。その後アルグおよびチャガタイ・ウルスの本体がどこに移動したのかは明かではないが、オルキナ・ハトゥンは 1263年にはアトバシ阿體八升 Ātbāsh で夏営している [『元史』卷 180, 列傳卷 67, 耶律希亮傳, 三]。アトバシはカーシュガルからトルガルト峠を越えてナリンに向かう道上のテンシャン山脈中の都市である。

ジャマール・カルシーは、アルグの死後、カラ・フラグの息子ムバーラク・シャーが 664年 Jumādā al-Ākhira 月 (1266年 3月-4月) にアーハンガラーン Āhangarān で即位し、その同じ年の Dhū al-Ḥijja 月 (1266年 9月-10月) にバラクがムバーラク・シャーを攻撃してホジェンド地方で彼を捕らえ即位した、とする [MŞ (2005): CLXXI; MŞ (Бартольд): 138]。アーハンガラーンは、タシュケント・オアシスの南東部分で東北から流れてきてシル川に流れ込む現在のアンダレン川の旧称であり、おそらくその川の流域地方を指す地名であったであろう。この川の流域はイスラム初期の時代からイーラーク Īlāq 地方としても知られ、現在のアンダレン川中流域にはかつての川の名前と同じアーハンガラーンという名の都市がある<sup>28)</sup>。ホジェンドはイーラーク地方の南、フェルガナ盆地の西の入り口に位置する都市である。

27) 遊牧民にとっての「人馬」の意味については川本 2013: 27-29 参照。

28) 「イーラーク州という地名は、Angren (正しくは Āhangarān) 川の流域を意味する [Barthold 1928: 169]。現在のアーハンガラーン市はいつから存在していたのかはわからない。また上流にはアンダレンという都市も存在している。

ワッサーフによれば、バラクはムバーラク・シャーをマー・ワラー・アンナフルから追って、チャガタイ・ウルスの政権を奪取し、663 (1264-65) 年の初めにウズガンド Ūzgard において即位し、アルグとオルキナの宝庫 (khazā'in) を自分のものとした。その時点でカイドゥは「タラス Talās とガンジャク Ganjak」にあり<sup>29)</sup>、ホジェンド川 (シル川) の辺でバラクと戦っている [TW: 67-68; TTW: 46]。ウズガンドはフェルガナ盆地東部のキルギズ共和国に属する現ウズゲン市である。

15 世紀前半ティムール朝の宮廷において書かれたナタンズイーの『ムンタハブ・タヴァーリーフ・ムーニー』のチャガタイ・ウルスのハンたちの記述はその当時モグールとよばれたモンゴル人たちの口頭伝承をもとに書かれ、他史書には見られない貴重な記録を含んでいる<sup>30)</sup>。それによれば、バラクはウズジャンド (ウズガンド) の郊外 (jōlgā-yi Ūzjand) に葬られているという。また、バラクの次に即位したという「バラクの息子のトゥカ・テムル (Tūqā Tīmūr bin Barāq)」(sic.) もウズジャンドの郊外に埋葬されている<sup>31)</sup>。バラクの子のドゥア (在位 1282-1307) もウズジャンドの郊外に埋葬されている。さらにドゥアは「トゥルキスタンとフェルガナにおいて、いくつかの大きな都市を復活させた。その中には「イスラムの殿堂」として知られる都市アンディガン Andigān (アンディジャン) があつた」[MTM: 104-106]。

1340 年までには書かれていたハムドゥ・アッラー・ムスタウフィーの地理書『ヌズハットゥ・ルクループ』には、フェルガナ地方 (wilāyat) について、「現在、その首都 (dar al-mulk) はアンディガンであり、それはオゴタイ・大ハンの息子カシの息子カイドゥとチャガタイ・ハンの息子ムワトゥケンの息子イエスン〔・トワ〕の息子バラクの息子ドゥアが建設した」とある [NQ: 246]。

『マイッズ・ルアンサーブ』はバラクの長子のベク・テムルについて注記して、

このベク・テムルはドゥアより年長であった。「カイドゥ動乱 (bulghaq)」において、大ハン (クビライ) のもとに行った。ドゥアが皇帝になってから兄 (ベク・テムル) の

29) ラシードは、「カイドゥの遺骨および彼より以前になくなった何人かの王たちは、イリ川とチュー川の二つの川の間のシャンコルルク Shanqurliq という名の高い大きな山に埋められている。——中略——カイドゥの娘のクトゥルンがそこにいた」と述べている [JT/II (Али-заде): 33]。このシャンコルルクよりタラスにかけて西に広がるアレクサンダー連山北側の広大な草原にカイドゥのユルトがあつた。ここはかつて西突厥の可汗の夏営地があつた地域である [玄奘 (水谷真成訳注) 『大唐西域記 1』平凡社, 1999: 61-64]。

30) [ティムールの息子] ウマル・シャイフ (d. 1394) の息子イスカングル (d. 1415/805) に献げられたこの書の「中央アジアの歴史に関する情報は、15/9 世紀の初めにシーラーズにいた [ティムールの息子] ウマル・シャイフと彼の息子たちに仕えていたモグーリスタンからきたチュルク-モンゴル系軍事貴族の口承伝承から得られたものである」[Woods 1987: 90]。また、「イスカングル自身、1384/786 年に彼の父ウマル・シャイフがフェルガナの支配者であつた時に生まれ」[彼の母の Malikat Āghā (d. 1440/844) はチャガタイ・ハンのバラク (1266-71/664-70) の子孫のフェルガナのチングス王朝の血を引く王女である」[Woods 1987: 93]。

31) このトゥカ・テムルは後述するチャガタイ・ハンのブカ・テムルのことである。

もとに使いを送り、「皇帝権は〔兄である〕あなたのものである」と伝えた。ベク・テムルは承諾せず、「〔自分の2人の息子の〕ヒンドゥー Hindū とサラール Sālār に良くしてやってくれ」と伝えた。その後ドゥアはウズケンド Ūzkand 地方にヒンドゥーを任命した。[MASHA : 31b ; JT (Blochet) : 168]

ウズガンド地方がバラクおよびバラクの子孫たちにとって特に重要な意味をもっていたことを示している。

カイドウの支配のもとでドゥアによって再興されたチャガタイ・ウルスは、バラクの時代と同様フェルガナ盆地東部を根拠地にしその近辺にユルトをもっていた可能性が高い。ウズガンドから東南に向かって峠を越えればカーシュガル・オアシスに至り当時トゥルキスタンとよばれているタリム盆地西部にはいる。ウズガンドの南を流れるカラ川は西に向かってアンディジャンの北を経て北からフェルガナ盆地に流れこむナリン川と合してシル川となる。ナリン川渓谷に沿ってさかのぼっていけばイシツクル湖の南を通ってイリ渓谷にまで達することができる。その途中で現在のナリン市から南行してカシュガルに向かえばアトバシの渓谷がある。ウズガンドから東北のヤシ峠を越えてアトバシに向かうルートもあった。これらの渓谷は古くから遊牧民のユルトであり、10世紀の地理書によれば当時ウズガンドはテュルクたちとの交易の中心地であったという [Barthold 1928 : 157]。また、シル川に沿って西進すればホジェンドに至り、ホジェンドはオゴタイ・大ハン時代の中央アジア総督マフムード・ヤラワチが総督府をおいていた都市である [TJ (tx. 1) : 111 ; 川本 2013 : 145-46, 176-79]。

以上、アルグがイリ川渓谷のユルトを追われてから約40年間チャガタイ・ハンたちのユルトはウズガンドを中心とするフェルガナ盆地の東部にあった。バラクが、アバガ・ハンに敗れて逃げ帰ってきたのも、その1年後にカイドウによって殺されたのもこのフェルガナ盆地東部の地だったのであろう。

## 5 バラクとドゥアの間のチャガタイ・ハン

大元ウルスのクビライは、1264年にアリク・ブカが降ってきた後も中央アジアで不穏な動きをするオゴタイ家のカイドウを牽制するため、1266年にチャガタイ・ハンとしてバラクを送り込んだ。彼はカイドウと何度か戦ったのちに和解して1269年「タラスのクリルタイ」においてカイドウの提唱したチャガタイ・ウルス、ジョチ・ウルス、オゴタイ・ウルスのトゥルイ家のクビライ（大元ウルス）、フラグ（フラグ・ウルス）に対する「カイドウ同盟」が結成された。その後バラクはクリルタイの決定にしたがってホラサーンに侵入し、フラグに代わったアバガ・ハンに敗北し（1270年7月）、中央アジアに逃げ帰り、翌年カイドウに殺された [村岡 1988 ; Biran 1997 : 19-36 ; 川本 2014 : 187-92]。それ以降のバラクの息子のドゥアが即位するまでのチャガタイ・ハンの統治年代がはっきりしない。ラシードの「チャガタイ・ハン紀」の二つの記事が矛盾しているからである。一応、ドゥアの即位年代

は以下に引用するジャマール・カルシーによる 681 年 (1282 年 4 月 11 日-83 年 3 月 31 日) が通説となっている。これ以外に年代の記述がないからである。

「チャガタイ・ハン記」の第 1 章では、

- ① バラクの後、彼の従兄弟のカダク Qadaq<sup>32)</sup>の息子ブカ・テムル Būqā Timūr がチャガタイ・ウルスの皇帝となった。彼の後にバラクの息子ドゥアがなった。カイドゥおよびその息子たちが彼〔の即位〕に同意したのである。[JT (Rowshan & Mūsawī) : 757; JT/II (Blochet) : 172]

「チャガタイ・ハン記」の第 2 章では、

- ② バラクの死後、チャガタイ・ウルスの皇帝権は、バラクの従兄弟のサルバンの息子のネギュベイ Nigubay に与えられた。3 年間皇帝であった。その後、チャガタイの 7 番目の息子カダカイ Qadaqay の息子のブカ・テムルに与えられた。しばらくの間皇帝であったが、「狐病」を患って全ての毛と鬚が抜け、その病で死んだ。その後カイドゥはチャガタイ・ウルスの皇帝権をバラクの息子のドゥアに与えた。現在も彼が皇帝である。[JT (Rowshan & Mūsawī) : 773; JT/II (Blochet) : 193]

ジャマール・カルシーはつぎのように述べている。

- ③ バラクは 670 年 (1271 年 8 月 9 日-72 年 7 月 19 日) 初めになくなり、バラクの後 670 年の中頃にカイドゥの許可のもとにチャガタイの息子サルバンの息子ネギュベイが即位した。それから、チャガタイの息子ムワトゥケンの息子ブリの息子カダガイ Qadaghāy の息子ブカ・テムル Būqā Timūr が、ネギュベイを公然と打ち負かして殺した後に即位した。カイドゥの指示により彼 (ネギュベイ) の地位に 671 年 (1272 年 7 月 20 日-73 年 7 月 17 日) に即位したのである。ブカ・テムルは 680 年<sup>33)</sup> (1281 年 4 月 22 日-82 年 4 月 10 日) に死んだ。681 年バラクの息子ドゥウが父と同じようにカイドゥの指示によって即位した。[MŞ (2005) : tx. CLXXI-XXII; MŞ (Бартольд) : 138-39]。

(1) サルバンの息子ネギュベイ

ホラサーンでの敗北後、バラクは自分を見限って逃亡していくチャガタイ家の王たちに追っ手を差し向けて殺害した。ラシードは第 I 卷第 3 部「イル・ハンたちの歴史」の「アバガ・ハン紀」において次のように語っている。

バラクはチャガタイの息子サルバンの息子ネギュベイ・オグルがホジェンド方面に向かったと聞いたので、その場からチャガタイの息子ムワトゥケンの息子ブリの息子カダカイ Qadaqay の息子であるナリク・オグル Nāliqū Oghūl を一軍と共に彼の後を追わせた。[JT (Rowshan & Mūsawī) : 1091; JT/III (Али-заде) : 133]

ナリクは、翌朝に彼 (ネギュベイ) に追いつき、外から彼の軍隊に矢の雨を降らせた。

32) プロッシュェ・テキストではカダクチ Qadaqchi となっている。

33) 新テキストでは 671 年となっているが、新たに発見された写本の誤記と見なしてバルトリドのテキストに従う。

ネギユベイに矢が当たり死んだ。彼のオールドを略奪し、軍隊を引き返させた。アフマド・オグルが〔バラクが派遣したアミールの〕ナウルダル Na'uldār によって殺されたという知らせがきた。ナリクはアフマドの親族であったので逃れてベシュバリクに行った。[JT (Rowshan & Mūsawi) : 1095; JT/III (Али-заде) : 137]

ラシードの「アバガ・ハン紀」ではネギユベイはナリクに殺されたことになっており、①「チャガタイ・ハン紀」第1章ではネギユベイの即位は書かれていない。しかし、同じ「チャガタイ・ハン紀」の②の記事とジャマール・カルシーはバラク後に即位したのはネギユベイとする。

ワッサーフは、ネギユベイを帰還させるために説得に送られたのはバラクの兄弟のヤサウルであり、説得は功を奏しかけていたが、アフマド・オグルが殺されたことが伝えられるやネギユベイはバラクの魂胆をさとり、バラクの下に行くことを拒否した。ヤサウルは引き返し、自らの軍を率いてバラクに対抗して立ち上がった。「全ての王たち (shāhzādegān) がバラクの魂胆と復讐のことを知り彼を憎悪した。ヤサウル配下の軍団 (Yāsāuriyān) はほかのアミールたちと同盟し、バラクを見捨て、カイドゥへの臣従へと向かった」[TW : 76; TTW : 51]。ワッサーフに拠ればネギユベイは死んでおらず、バラクの兄弟のヤサウルも反旗を翻した。

ワッサーフが述べるこのヤサウルの造反に対して、ラシードは、ヤサウルはバラクによってカイドゥのもとに使者としておくれられ、会見の場で、昨年のホラサーン侵攻の際の行動の責任を問われて逮捕されたとされる [JT/III (Али-заде) : 133-34; JT (Rowshan & Mūsawi) : 771-72, 1092-94]。いづれにせよカイドゥのもとにいつているのである。

このワッサーフの記事により、サルバンの息子ネギユベイは殺されておらず、バラクの後にチャガタイ・ハンとして即位したのはネギユベイであったと判断してもいいだろう。②のネギユベイが3年間統治したか、③の670年の頃から671年までの統治か、については後述する。

## (2) チャガタイの7番目の息子カダカイの息子ブカ・テムル?

増補版は、チャガタイには6人の息子がいるとしながらも、②「チャガタイの7番目の息子カダカイ Qadāqay の息子のブカ・テムル」をそのまま写しているのは、増補版はなぜか第2章では第1章の自らの修正をほとんど無視して初版を写していることによることはずでにのべた。

初版本系統写本とティムール朝改訂版系統写本は第1章の最後の部分に次のようにある。

チャガタイの第7番目の息子 カダカイ Qadāqay

彼の母はテゲン・ハトゥン Tūkān Khātūn である。このカダカイには5人の息子がいた。

① ナヤ Nāyā ② ブク Būqū ③ ナリク Nāliqū<sup>34)</sup> ④ ブカ・テムル ⑤ ブカである。

34) JT/II (Blochet) : 177 ではナリコア Nāliqūā とになっているが、ここ以外の表記を参照してナリク

[JT/II (Blochet) : 177]

上述引用①の「[バラクの] 従兄弟のカダク<sup>35)</sup>の息子ブカ・テムル」と③の「チャガタイの息子ムワトゥケンの息子ブリの息子カダガイの息子ブカ・テムル」は同一人物であることは疑いない。

すでに述べたように初版本 [サンクトペテルブルク PNS46 写本 : 192b ; ランプル写本 : p. 50 ; イスタンブル 282 写本 : 409a ; ミュンヘン写本 : 251a] ではブリの子は 2 人とされ ① アビシュカ ② アジキしかあげられていない。しかし増補版を含むその他の写本と JT/II (Blochet) : 164-65 ; JT (Rowshan & Mūsawī) : 753-54 では息子は 5 人とされ上記 4 写本のアビシュカとアジキの説明に残りの 3 人分の説明が付け加わっている。増補版では① カダカイ・セチェン Qadāqay Sechān ② アフマド ③ アジキ ④ アビシュカ ⑤ エブゲン Ebügen となっている [イスタンブル写本 : 170b]。JT/II (Blochet) : 164-65 では、③ カダクチ Qadāqchi・セチェン ④ アフマド ⑤ エブゲンとなっているが、このカダクチ・セチェンと増補版のカダカイ・セチェンは同一人物であり、彼の息子たちの説明は「カダカイ (カダクチ)・セチェンには 4 人の息子がいる。① ナリク 彼にはテムル、ウラダイ、テムメンの 3 人の息子がいた。② ブク 彼にはズル・カルナイン、アリーの 2 人の息子がいた。③ ブカ・テムル 彼にはウリュグ・テムルとオルジェイタイの 2 人の息子がいた。④ ブカ 彼には息子はいなかった [JT (Rowshan & Mūsawī) : 753 ; JT/II (Blochet) : 165-66]」と同じである。このカダカイ・セチェンの 4 人の息子たちの名は、上の引用のチャガタイの 7 番目の息子とされたカダカイの息子たちのナヤを除く 4 人の息子たちの名前と一致する。

増補版の編者は、何らかの情報を得て初版本の 7 番目の息子のカダカイの系譜はブリの息子のカダカイ・セチェンの系譜であると判断し、初版本の「チャガタイ・ハン紀」第 1 章から 7 番目の息子を削ったのである。そして、初版本ではアビシュカとアジキの二人しか書かれていなかったブリの息子たちの系譜の中に 1 番目の息子としてカダカイ・セチェンを彼の系譜と共に書き加え、さらに彼以外の 2 人の息子の情報もそこに付け加え、結果としてブリの息子は 5 人となった。しかし、増補版は自らが起こった第 1 章の修正を第 2 章を写した際に反映させず、初版本の②の記述をそのまま写してしまった。

一方、ティムール朝時代に初版本の修正を行った編者は増補版を見てブリのカダカイ・セチェン以下の息子たちを書き加えたが、そのまま初版本の第 1 章のチャガタイの 7 番目の息子の記述も書き写した。その結果ティムール朝時代の改訂版の写本群においては、チャガタイの 7 番目の息子の系譜の記述とブリの 3 番目の息子の系譜の記述の両方が残ってしまったのである。

『五族譜』とティムール朝時代につくられた系譜集『ムイッズ・ルアンサーブ』には、問

↙ クとした。

35) プロッシュェ・テキストではカダクチ Qadāqchi となっている。

題の人物はムワトウケンの息子のブリの息子のカダカイ・セチェン<sup>36)</sup>として現れ、「モンケ・大ハンは彼をセチェンと名付けて、バフシのように頭を剃らした。モンケ・大ハンは彼をともなってヒタイに向かった。彼はその途上でなくなった。彼の息子たちは現在ドウアのもとにいる」と注記している [ShP: 118b; MASHA: 29b; Barthold 1928: 483, 511]。

また、『五族譜』は、息子のブカ・テムルに対する注記で、「このブカ・テムルは、ネギュベイの後に、チャガタイ・ウルスを支配した。その状況は以下の如く。ネギュベイは、ナリクとこのブカ・テムルとブカの三人を捕らえた。しばらくして彼らは彼（ネギュベイ）の軍隊と共謀してネギュベイを捕らえ殺害した。そして皇帝権はこのブカ・テムルの上に確定した [ShP: 118b]」と書く。この三人はカダカイ・セチェンの上述した4人の息子の内の3人の名と一致する。

『ムイッツ・ルアンサーブ』は、ブカ・テムルに対する注記に「671年にチャガタイ・ウルスのスルタン位はこのカダミ Qadāmi・セチェン (sic.) の息子ブカ・テムルの上に確定した」としている [MASHA: 30a]。この年代は③のブカ・テムル即位年代と一致する。

これら二つの系譜集がどこからこれらの情報を得たのかはわからないが、注記の内容は、バラクとドウワの間の二人のチャガタイ・ハンの即位および即位年代については、上記引用③のジャマール・カルシーの記録が最も信頼置けるものであることを示している。

### Ⅲ チャガタイ・ウルスとカラウナス＝ニクダリヤーン

#### 1 「カシミール地方とバダフシャーとバルフの辺境地帯」に送られたタンマ軍の分裂

オゴタイ・大ハンによって、1230年前後に「カシミール地方とバダフシャーとバルフの辺境地帯」に派遣された2テュメンのタンマ軍は、モンケ・大ハン（在位 1251-59）によって1253年に西アジアに派遣された大ハンの弟フラグ指揮下の軍隊にはいることを命ぜられた [川本 2015: 4; 川本 2013: 111]。おそらくバドギースに駐屯していたこのタンマ軍の一部は、早い段階でフラグの指揮下に入っていたものと思われる。フラグのイル・ハン位を継いだ息子のアバガ（イル・ハン在位 1265-82）即位時には、すでにイル・ハンの軍隊の中核にカラウナスとよばれる軍団がいた<sup>37)</sup>。また、後の「ノウルズの反乱」の時さえ、カラウナスとよばれるいくつかの集団がホラサーン東部に現れる。彼らはフラグの時代からイル・ハン国のホラサーンを守備する王子たち（アバガ、トブシン、アルゲン等）の配下に組み入れられていたこのタンマ軍であった。

モンケ・大ハンの死の翌年 1260年、開平府（後の上都）およびモンゴリアで相次いで大ハ

36) 『ムイッツ・ルアンサーブ』では Qadāmi Sechān となっている。『ムイッツ・ルアンサーブ』はチャガタイには8人の息子がいたとするが、その中にカダカイまたはカダミという名は見いだせない [MASHSM: 29b]。

37) その後のイル・ハン国におけるこのカラウナスの運命については、志茂 1995: 38-64 参照。

ンに即位したモンケの弟クビライとアリク・ブカの間で大ハン位をめぐる戦争がはじまった。帝国の解体すなわち大モンゴル・ウルスを構成する各ウルス間の内戦のはじまりである。これ以降、フラグ・ウルスに従っていたこのタンマ軍団に、ジョチ・ウルス、チャガタイ・ウルスが強く働きかけ、自分たちのウルスへ取り込もうとし、そのことがこのタンマ軍を分裂させた。

アリク・ブカは、クビライに対抗してチャガタイ・ウルスをみずからの陣営に取り込むために、チャガタイの第6子バイダルの息子アルグを派遣したが、その直後1261年中にアルグはこのタンマ軍の一部を自分の支配下に取り込むことに成功したらしい。ワッサーフは、アルグがサダイ・エルチ Sadāy Īlchī というアミールをヒンドゥスターンの辺境に派遣し、モンケ・大ハンがこのタンマ軍の総司令官として送っていたサリ・バハードゥル Sālī Bahādur (ラシードのサリ・ノヤン) を捕らえて送るように命じ、サダイ・エルチは、Marghāul (読み不明) とクトウルグ・テムルとテムル・ブカその他のサリ・バハードゥル配下のアミールたちを懐柔して従わせて、サリを逮捕して彼の軍隊全てを自分のものとしたと伝えている [TW: 12; TTW: 12; Aubin 1969: 82]。このタンマ軍の少なくともその一部はチャガタイ・ウルスに組み入れられた。

この事件との前後関係は明らかではないが、イランにおけるジョチ家の利権をめぐる対立から発生したジョチ・ウルスのベルケ・ハンとイル・ハンのフラグとの戦争 (1262年) の直前にフラグの指揮下に入っていたジョチ・ウルス派遣の軍隊が逃亡するという事件が起こった。

一部の〔ジョチ家派遣の〕軍は、ホラサーンを経て出奔し、ガズナやビーニー・ガーウ Bīnī-yī Gāw の山々からヒンドゥスターンの辺境のムルタンやラホールまでを占拠した。彼らの指令官で最大のアミールはネギュデル Nigūdar であった。[JT (Rowshan & Mūsawī): 738-39]。

ネギュデルはジョチ・ウルスからこのタンマ軍に派遣された將軍であったが、逃亡したジョチ・ウルスの軍隊の一部がネギュデルの下に逃れ合流したのである。この事件によりネギュデル率いる集団はそれまで従属していたイル・ハンと鋭く対立するようになった [Aubin 1969: 74; 北川 1980: 44-46]。

イル・ハン国領内で略奪行為を働くカラウナスの王がネギュデルとされ、イル・ハンに帰順した軍団以外のカラウナスがネギュデルの一党すなわちペルシア語表記ニクダリヤーンとよばれるようになった直接の原因はこの事件である [川本 2015: 9-10]。しかし、ネギュデルが死んだ後、遠く離れたジョチ・ウルスとの連絡は切れ、ニクダリヤーンと他のカラウナスとを区別する必要は失われた。カラウナスとニクダリヤーンという呼称が同じ意味で使われ出すのは1270年代の後半以降、彼らがイル・ハン国のイラン、デリー・サルタナトのインドに盛んに侵入するようになってからである<sup>38)</sup>。

38) ボスワースはニクダリヤーンという言葉について、「辺境のカラウナスは、第三番目の集団すなわ

大モンゴル・ウルス時代に派遣されフラグ・ウルスに従属することになった多くの部族集団から成るこのタンマ軍は、1260年代に敵対しあうフラグ・ウルス、チャガタイ・ウルス、ジョチ・ウルスに拠る3つ以上の集団に分裂していたと考えられる。

1270年代以降、中央アジアのカイドゥは、チャガタイ家の王族たちを派遣してこのタンマ軍を取り込み、これをイランに侵入させてイル・ハン国を牽制し、インドに侵入させ多くの人的資源を中央アジアにもたらそうとした。しかし、この過程はあまり明確ではない。それは一次資料であるラシード・ウッディーンの「チャガタイ・ハン紀」のテキストに大きな問題があるからである。

## 2 カラウナス=ニクダリヤーンの支配者ムバーラク・シャー

初版本系統写本およびティムール朝時代の改訂版系統写本はすべて、ムワトゥケンの息子カラ・フラグの説明の中のカラ・フラグの息子ムバーラク・シャーについての説明の最後に、「バラクが、アバガ・ハンとの戦争のためにホラサーンに侵入してきた時、ムバーラク・シャーは彼（バラク）と共にいたが、逃れてアバガ・ハンに仕えるために来た」とする[J/T/II (Blochet): 174]。しかし、この部分を含むムバーラク・シャーについての説明は、増補版系写本[イスタンブル写本: 170a; ロンドン 16688 写本: 11a]にはない<sup>39)</sup>。増補版の編者は第3部の「アバガ・ハン紀」の次の記述によりこの初版本の記述が誤りであることを見抜きムバーラク・シャーの説明を「チャガタイ・ハン紀」第1章から取り除いたのである。

1271年、バラクの死後、カイドゥは彼を埋葬させ、「翌日、ムバーラク・シャーとチュベイ Chūbay とカバン Qabān が全ての千人隊と万人隊のアミールたちと共にやってきて、カイドゥに向かって跪いて、「今日以降カイドゥ兄 (Qaidū āqā) が私たちの兄です。命じられたことに全て従います……」と言った [JT (Rowshan & Mūsawī): 1096; JT/III (Али-заде): 138]」。

この時点でかつてバラクに廃されたムバーラク・シャーがカイドゥに従ったことが確認される。しかし、その後チャガタイ家の王たちはつぎつぎと離反した。

بعد از آن بيکنمور پسر مهتر براق و پسران آغو چوبای و قبان ياغی شدند و به بندگی قآن رفتند؛ و چباط برادرزاده اوگتای قآن نیز با جمعی امرا به بندگی قآن رفت؛ و بعد از آن [پسران] مبارکشاه و پسر قراھولاگو نیز به خدمت آباقا خان آمدند به اعزاز و اکرام مخصوص گشته به سر لشکری لشکر نگویدر که در حدود غزنه می بودند منصوب شدند [و در آن سال که اباقاخان به شهر هرات رفته بود جهت دفع قراؤنا پسران مبارکشاه با تمامت آوردو ها خود به خدمت اباقاخان بیامدند و تا غایت اینجا بودند؛ و یسائر برادر براق هم در آن وقت به اسم ایلی و مطاوعت به بندگی آمد]

↘ わちネギュデルに率いられた集団を含んでいた。その名は民族的集団の呼称となり、また、最もよく知られた、と言うより最も悪名高いカラウナスを構成する一部分の集団を指す呼称となった。「カラウナスとネギュデリー」というこの二つの言葉は歴史資料においては同じ意味で使われ始めた」[Bosworth 1994: 422, 423]と述べている。

39) JT (Rowshan & Mūsawī): 758-59では[ ]にいれてプロッシュェ・テキストから補われている。またタシュケント写本ではこの部分を含む一葉が失われている。

その後、バラクの長子ベグ・テムルとアルグの息子たちのチュベイとカバンが〔カイドゥに〕叛き、〔クビライ・〕大ハンに仕えるために去った。オゴタイ・大ハンの甥 (sic.) の〔グユク・大ハンの息子ナクの息子〕チャバト Chabat も一団のアミールたちと共に大ハンに仕えるために去った。その後、カラ・フラグの息子すなわちムバーラク・シャー〔の息子たち〕もアバガ・ハンに仕えるためにやってきて、尊敬をもって遇され、彼らはガスナ地方にいたネグユデル軍の長に任命された。〔すなわち、アバガ・ハンがカラウナを撃退するためにヘラートに行った年、ムバーラク・シャーの息子たちが彼らの全オールドと共にアバガ・ハンに仕えるためにやってきて、現在もそこにいるのである。バラクの兄弟のヤサウルもその時に服従してきた。〕[JT (Rowshan & Mūsawī): 772-773; イスタンブル写本: 174b; タシュケント写本: 145b; ロンドン 16688 写本: 17a]

初版本系統写本およびティムール朝時代の改訂版系写本では、引用の初めの〔〕の「息子たち」という単語はなく、「カラ・フラグの息子すなわちムバーラク・シャー (مبارکشاه وپسر قراھولانو) 」が主語になっており (動詞も三人称単数)、また後の〔〕につつまれた文章はすべてない [サンクトペテルブルク PNS46 写本: 195b; イスタンブル 282 写本: 411a; ミュンヘン写本: 254b; JT/II (Blochet): 192]<sup>40)</sup>。ただ、ランブル写本: 59 だけは〔〕につつまれた部分が左側の欄外に黒い小さな字で書き込まれている<sup>41)</sup>。あきらかに写本が完成した後に増補版が参照され書き込まれたのである。

初版およびティムール朝時代の改訂版系統写本に従えば、ムバーラク・シャーはバラクがアバガ・ハンに敗れた戦いの前後の段階でアバガ・ハンのもとに逃れたが、バラクが死んだ時点でふたたびカイドゥに従い、後にカイドゥに叛いて再び亡命してアバガによってニクダリヤーンの長に任命されたことになる。従来はプロッシェ・テキストによってムバーラク・シャーは一旦臣従していたカイドゥのもとからイル・ハンのアバガ・ハンの下に亡命し、アバガによってネグユデル軍の長に任命されたと解釈されてきた [Aubin 1969: 83]。

しかし、増補版には、バラクの下からも、カイドゥの下からもムバーラク・シャーがイル・ハンのもとに亡命してきたとは書かれていない。増補版写本およびそれに依拠するロウシャン・テキストよれば、ムバーラク・シャーは一度もイル・ハンの下に亡命してはおらず、後にカイドゥに叛いて亡命してきたのはムバーラク・シャーの息子たちである。増補版の編者は、引用部分の初版本の文章から「息子たち」という単語が抜けおちているために文意が事実と異なってしまっていることに気がつき、「息子たち」を補い、「ムバーラク・シャーの息子たち」が亡命してきたのはいつのことであったかを説明するために初版本にはなかった

40) タシュケント写本とイスタンブル写本から翻訳しているベルホプスキイのロシア語訳では「ムバーラク・シャーの息子たち」がネグユデルの軍の長に任じられたことになっており、後の〔〕の部分もその通り翻訳されている [JT/II (Верховский): 100]。

41) 右下がりの斜め 5 行にわたるが、製本の際に左側半分が裁断されてしまっている。

後の [ ] 中の文章を付け加えたのである。

増補版によって付け加えられた説明により、モバーラク・シャーの息子たちが亡命してきた事件は「アバガ・ハン紀」の次の二つの記述の事件と同じ事件を指すことがわかる。

虎の年 677 年 Muḥarram 月初日 (1278 年 5 月 25 日), アバガ・ハンはタブリーズを出発してホラサーンに向かった。678 年 Rabī' al-Awwal 月 3 日 (1279 年 7 月 14 日) アルゲン王子を一軍と共にニクダリヤーン Nikūdariyān の撃退のために派遣した。彼はシースターン<sup>42)</sup>に至り、彼らを包圍し、帰還し、ムバーラク・シャーの長子のオルジェイ・ブカとそのほかの彼の親族たちを連れてきた。Rabī' al-Awwal 月 14 日 (1279 年 7 月 25 日) アバガ・ハンはヘラート市に着き、その月末カラウナ Qarāūnā のアミールたちが服属してきた。Rabī' al-Ākhir 月 2 日彼らは贈り物を献上して謁見し、アバガ・ハンは彼らを慰撫し、首都のタブリーズに帰還した。[ [JT (Rowshan & Mūsawī) : 1109-10; JT /III (Али-заде) : 152-53]

678 (1279 年 5 月 14 日-80 年 5 月 2 日) 年, ファールスを荒らしているカラウナの軍隊を撃退するために、アバガ・ハンはホラサーンに向かった。ブルガン・ハトゥンとガザンを伴った。アルゲンが迎えに来てセムナーンで〔父への〕ご奉仕に至った。——中略——アバガ・ハンは、キートゥー・ジャーム Kitū Jām とヘラートに向かい、アルゲン・ハンをゲール Ghūr とガルジャ Garjah (ガルチスターン) にカラウナを撃退するために派遣した。[[JT (Rowshan & Mūsawī) : 1210-11; JT/III (Али-заде) : 252]

このアバガのホラサーン行きは、この時期に頻繁にイル・ハン国領内へ侵入していたニクダリヤーン=カラウナスを征討するためにおこなわれた。直接のきっかけはその前年「677 年寅年の冬 (1278 年から 79 年にかけての冬), ニクダリヤーンの 2 千人ほどの騎兵がファールス地方を襲った。——中略——ニクダリヤーンはシーラーズの町の門にまで達し、ピールズイー苑から馬を追い、町の郊外を襲撃し、略奪した」[[JT (Rowshan & Mūsawī) : 1108; JT/III (Али-заде) : 151]] ことであった。

新出の無名氏によるケルマーンのカラ・ヒタイ朝史『ターリーヘ・シャーヒーイエ・カラ・ヒタイヤーン』によれば、アバガ・ハンがホラサーンに出発したのは 678 年 Muḥarram 月の初旬 (1279 年 5 月後半) であるが [TShQ: 209], その前に詳しく書かれている 677 (1278 年 5 月 24 日-79 年 5 月 13 日) 年のニクダリヤーンのケルマーン, ホルムズ, ファールス侵攻が上記のラシードのニクダリヤーンのファールス侵攻に当たる [TShQ: 205-8; 北

42) カラウナス=ニクダリヤーンに関してでてくるシースターンという地名は、通常使われるヘルマンド川やファラーフ川やハシュ Khwash 川が沙漠に流れ込み湖を形成するザーボル Zābol やかつてのザランジ Zaranj を中心とする今日のアフガニスタン西南部の地域をさすのではなく、次の引用文のゲールとガルジャ (ガルチスターン) を含むヘルマンド川溪谷からガズナにかけての今日のアフガニスタンの東部及び北部の広大な地域を指し、ワッサーフに「シースターンの深奥」(buṭūn-i Sīstān) [TW: 199] として現れることについては Aubin 1969: 91; Bosworth 1994: 423 参照。

川 1981 : 1-3]。また、ワッサーフの「ネギュデルの軍隊のファールスへの侵攻の話」もこの677年のニクダリヤーンの侵入のことである [TW : 198-199 ; TTW : 114-16]。

ムバーラク・シャーの息子たちがカラウナス＝ニクダリヤーンの一部を率いて投降してきたのはこのアバガがヘラートに来た時のことである。彼らはカラウナス＝ニクダリヤーンの一部を率いて投降し、そのままその長に任命されたのであろう。

また、上記ペルシア語引用の [ ] に入れた増補版の補いには「バラクの兄弟のヤサウルもその時に服従してきた」とある。増補版系統写本群は「チャガタイ・ハン紀」第1章のヤサウルの説明として次のようになっている。

یساور، به ایلی اینجا آمده در آن سال که آباقا خان به هرات رفته بود به دفع قراؤناس و به وقت آنکه احمد از خراسان بگریخت، امرا او را بکشتند [و براق را پسران و نبیرگان بسیار اند؛ و چون بعد از تحریر کتاب معلوم شد، اسامی ایشان در این موضع متعذر بود بدان سبب ایراد نرفت؛ و در شعبه او مذکور است از آنجا مطالعه باید کرد.]

[イエسن・トゥワの3番目の息子で、バラクの兄弟の] ヤサウルはアバガ・ハンがカラウナスを撃退するためにヘラートに来た時、降服して (be Īli, こちらの (イラン) に来た。[イル・ハンの] アフマド〔・テギュデル〕 (在位 1282-84) がホラサーンから逃げ出した時にアミールたちが彼を殺した。[バラクには、息子、孫がたくさんいた。しかし、この本が書かれた後に彼らの名が知られることとなったので、それらをここに書くことはできなかった。それ故ここには名をあげてはいない<sup>43)</sup>。彼の子孫たちについてはすでに書かれているので、それを参照しなければならない。] [JT (Rowshan & Mūsawī) : 754, l. 23-755, l. 4 ; イスタンブル写本 : 169a ; タシュケント写本 : 140a ; ロンドン 16688 写本 : 9b]

ティムール朝時代の改訂版系統写本 [JT/II (Blochet) : 169 ; パリ 209 写本 : 211a ; サンクトペテルブルク写本 : 191b ; パリ 1113 写本 : 157a] では [ ] につつまれた文章がない。初版系統写本群 [サンクトペテルブルク PNS46 写本 : 191b ; ランプル写本 : 49 ; イスタンブル 282 写本 : 408b ; ミュンヘン写本 : 249b] ではこのペルシア語引用部分すべてがない。献呈された初版にはこの文章は入っておらず、この説明は上記ペルシア語の引用部分のヤサウルの亡命をさらに補うために増補版が初版本に書き加えた説明なのである。

ティムール朝時代の改訂版写本群は、モバーラク・シャーの息子たちについて書かれた上記ペルシア語の引用部分の増補版による補いを写していないにもかかわらず、ヤサウルの亡命についてのこの文章は入っている [JT/II (Blochet) : 168-69 ; パリ 209 写本 : 212b ; パ

43) 確かに本文にはバラクの息子5人(トゥカイ Tūqāy, ウラダイ Ūlādāy, ブズマ Būzmah, ドゥア Dūā, ベグ・テムル Bik Timūr)しかあげられていないが [JT (Rowshan & Mūsawī) : 754], ロウシャン&ムーサヴィー・テキストには再現されていない増補版 [イスタンブル写本 : 171a ; タシュケント写本 : 140b] の系図にはドゥアの10人の息子たちも含むバラクの子孫たち多数の名前があげられている。

り 1113 写本：157a；サンクトペテルスブルグ D66 写本：201a]。増補版の修正を意識することなく、また初版本の矛盾に気付くことなく増補版からそのまま書き写してしまったのであろう。しかし、[ ] の増補版のバラクの子孫たちの説明は省略した。

オバンは、1316-7 年に書かれたケルマーンのカラ・ヒタイ朝史に記録されていた「カラウナスの軍隊」(lashkar-i Qarāunās) を率いてのケルマーン攻撃においてバムで死んだムバーラク・シャーは「多分」このムバーラク・シャーであるとし、それは 1274 年以前であるとした [Aubin 1969: 83; S'U: 48]。しかし、オバンの研究後に出版された上述無名氏『ターリーヘ・シャーヒーイェ・カラ・ヒタイヤーン』には、675 年 Rabī 月初旬 (1276 年 8 月下旬)、「チャガタイの親族 (ostokhān-i Chaghatāy) のムバーラク・シャー」に率いられた「ネギュデルの軍隊」(lashkar-i Nikūdar) がケルマーンを攻撃した時にムバーラク・シャーが殺されたとあり [TShQ: 248-250]、これによりムバーラク・シャー率いるカラウナス＝ニクダリヤーンの軍隊がケルマーンを攻撃しムバーラク・シャーが死んだ年代が確定した。

ムバーラク・シャーはおそらくカイドゥによってカラウナス＝ニクダリヤーンの長に任じられ、彼らを率いてケルマーンに侵入して死んだ。決してイル・ハンによって彼らの長に任命され、その後イル・ハンを裏切ってイル・ハン国領域に侵入してきたのではない。ムバーラク・シャーがバムで死んだ後、おそらく彼の息子たちがその地位に即き、アバガがホラサーンに行った 1279 年に、彼らがバラクの兄弟のヤサウルと共にカラウナス＝ニクダリヤーンの少なくともその一部を率いて亡命し、アバガによってそのカラウナス＝ニクダリヤーンの長に任命されたのである。

### 3 カラウナス＝ニクダリヤーンの支配者アブド・アッラー

ヘラートのクルト朝の支配する地域を除く、ほぼ現在のアフガニスタンにあたる地域に広く展開するカラウナス＝ニクダリヤーンとよばれる複数の遊牧部族の集団は、イル・ハンに帰属した一部を除いて 14 世紀末までにチャガタイ家の支配者を戴くことになった [川本 2015: 11-14]。ラシードは 3 箇所においてこのことを述べているが、プロッシュェ・テキストに依拠する先行研究の解釈には問題があり、該当部分のテキストと翻訳をあげて検討する。すでに述べたようにチャガタイの息子の順番は、ティムール朝時代の改訂版系統写本では増補版を見て修正されている。まず初版系統写本群から作成したテキストを以下に提示して訳す。

①

پسر

پنجم چغتایی بايجو

اورا پسری بوده بوجی نام و این بوجی آنست که حاکم چریک قراونه بود در حدود غزنین و او را پسر بیست عبد الله نام و مسلمان است و بجای پدر دران حدود می بود دوا او را پیش خود خواند و پسر خویش قوتلق خواجه را به عوض او آنجا فرستاد

チャガタイの5番目<sup>44)</sup>の息子のバイジュ

彼にはブジャイ Būjay<sup>45)</sup>という名の息子がいた。このブジャイはガズニーン地方のカラウナ軍の支配者 (hākīm) であった。彼にはアブド・アッラーという息子がいた。彼はイスラム教徒であった。父の地位を継いでその地方にいた。ドゥアが彼 (アブド・アッラー) を自分もとに呼び出し<sup>46)</sup>、彼に代えて自分の息子のクトウルグ・ホジャを派遣した。[サンクトペテルブルク PNS46 写本: 193a; ランプル写本: 52; イスタンプル 282 写本: 409b; ミュンヘン写本: 251a-251b]

② 698 (1298-99) 年まで、ニクダリヤーンの支配者は、チャガタイの孫 (navāde) のブジャイ Būjay の息子のアブド・アッラーであった。その時バラクの息子のドゥアが彼を呼び出し、自分の息子のクトウルグ・ホジャをその地位につけた。彼 (クトウルグ・ホジャ) も、700 (1300-01) 年にファールス地方に軍隊を派遣し略奪した。[JT (Rowshan & Mūsawī): 1109; JT/III (Али-заде): 152]

③ 彼 (ドゥア) は、息子の一人クトウルグ・ホジャにガズニーン地方と以前から彼ら (チャガタイ家) に属するカラウナ軍を委ねていた。彼らは、夏はゲール地方とガルチスターン地方におり、冬はガズニーンとその方面にいる。彼らは常にデリーのスルタンたちと戦わねばならず、デリー〔・サルタナト〕の軍隊は何度も彼らを打ち破った。また、いつも強盗、追いはぎとしてこの国 (イラン) の境域にも侵入し、恐慌を引きおこしていた。[JT (Rowshan & Mūsawī): 758; JT/II (Blochet): 173]

①と②のアブド・アッラーは明らかに同一人物である。オバンは、ブロッシェ・テキストによってこのアブド・アッラーをチャガタイの8番目の息子の孫とするが、チャガタイの子孫のもう一人のアブド・アッラーと混同しないように注意している [Aubin 1969: 83-84; Jackson 1999: 121]。もう一人のアブド・アッラーはムワトゥケンの第1番目の息子バイジュの曾孫としてあらわれる。

## ムワトゥケンの第1番目の息子バイジュ

彼にはトゥダン Tūdān という名の息子がいた。このトゥダンにはブジャイ Būjay という息子がいた。ブジャイにはアブド・アッラーという息子がいた。[JT (Rowshan & Mūsawī): 753; JT/II (Blochet): 163]

すでに述べたように、この記述は増補版とティムール朝時代の改訂版系統写本にのみ現れ、初版本系統写本群 [サンクトペテルブルク PNS46 写本: 191b-192b; ランプル写本: 47-51; イスタンプル 282 写本: 408a-409a; ミュンヘン写本: 249b-251b] には存在せず、初版

44) JT/II (Blochet): 177 では8番目の息子となっている。

45) JT/II (Blochet): 177 ではモチ Mūchī となっている。

46) JT/II (Blochet): 177 ではこの文の主語のドゥアが抜けている。従来はオバンに従って主語としてドゥアを補って読まれていた [Aubin 1969: 84, 注2]。しかし、本稿で校訂に使った初版系統写本群ではすべて明確にドゥアという主語が入っている。

にはバイジュやブジャイやアブド・アッラーなる名を持つムワトゥケンの子孫は出てこない。一方、増補版系写本は、チャガタイの息子は6人としてその中にはバイジュなる息子はおらず上記①の記述も存在しない。②の「チャガタイの孫のブジャイの息子のアブド・アッラー」はこのムワトゥケンの子孫をさしていると考えべきである。navādeという言葉は孫を指すのではなく子孫をさすと解釈することは可能である。

増補版の編者は、増補版編集の際に何らかの情報を得て初版本のチャガタイの5番目の息子のバイジュの系譜は、ムワトゥケンの第1番目の息子バイジュの系譜が誤ってそこに書かれてしまったと判断したのであろう。そこで増補版は初版本のチャガタイの8人の息子の記述の5番目の息子の記述を削除し、それをムワトゥケンの第1番目の息子バイジュの系譜として、バイジュのトゥダンという名の息子を補って書き入れた。その結果、初版では3人しか書かれていなかったムワトゥケンの息子は増補版では4人となりその順番も変えられた。増補版が、なぜ初版本ではバイジュであったチャガタイの5番目の息子の位置に初版本では3番目の息子とされるイエス・モンケを入れたのかは不明であるが、その結果初版の4番目の息子であったベルゲシが3番目にくり上がり、空いた4番目の位置に8番目の息子とされていたサルバンがもってこられた。

ティムール朝時代の改訂版の編者は、増補版を見てそのまま5番目の息子をイエス・モンケとしたが、初版本の5番目の息子バイジュの記述をチャガタイの8番目の息子として書き込み、初版本に8番目の息子として書かれていたサルバンを増補版にあわせて4番目にもってきた。そのうえ増補版が増補・加筆したムワトゥケンの第1番目の息子バイジュの系譜もそのまま書き込み、結果としてどちらかを削除しなければならないバイジュ、ブジャイ、アブド・アッラー3人の名前と順序が一致する二つの系譜を書き残し、それがブロッシェ・テキストとして固定され現代の研究者たちの混乱を生んだ。

以上、ティムール朝時代の改訂版の文章の中にしか現れず、増補版が誤りとして廃棄したアブド・アッラーをチャガタイの8番目（初版では5番目）の息子バイジュの孫とする解釈は捨てるべきである。彼はチャガタイの長子ムワトゥケンの曾孫である。同様に①のみにあるアブド・アッラー以前はその父のブジャイがガズニーン地方のカラウナ軍の支配者であったとする記述も事実として受け入れることはできない。ムワトゥケンの孫のブジャイがカラウナ軍の支配者であった可能性は残るが、今のところアブド・アッラー以前にカラウナス＝ニクダリヤーンの軍隊をチャガタイ家のだれが率いていたのかはわからないとすべきであろう。すでに見たようにムバーラク・シャーおよび彼の息子たちが率いていた可能性はあるが、そもそもカラウナスは多くの遊牧民の部族集団からなり、それらが離合集散を繰り返していたと考えられるから、アブド・アッラーが率いていたカラウナスは、ムバーラク・シャーの息子たちとイル・ハンのもとに亡命した集団とは別の集団であるかもしれない。

前述のケルマーンの地方史は、ケルマーンのスルタンが、イル・ハン宮廷で企てられていた彼に対する陰謀に対抗するため、チャガタイ・ハンの孫（navāde）のアブド・アッラー・

オグルにカラウナスの部隊の派遣を求めたと伝えている [S'U: 49; Aubin 1969: 83]。記述の順序からすればムバーラク・シャーのケルマーン侵攻と死 (1276 年) よりも後のことと考えなければならない。また、デリー・サルタナトのハルジー朝ジャラル・ウッディー・フィールーズ (在位 1290-96) 時代の 691 (1292) 年にアブド・アッラーはカラウナスを率いてパンジャブ地方深く侵入している [Jackson 1999: 118]。これらのアブド・アッラーが全て同一人物だとすれば彼は 1276 年以降 1292 年までカラウナス=ニクダリヤーンの少なくともその一部を率いていたことになる。

以上の第 2 節と第 3 節の論証から、チャガタイ・ウルスとカラウナス=ニクダリヤーンの関係はつぎのように想定されよう。

1) バラクの死後、ムバーラク・シャーがおそらくカイドゥの指示でカラウナス=ニクダリヤーンを率いていた。その支配がイル・ハンに帰属していなかったカラウナス全体におよんでいたかどうかは不明である。2) 1276 年にムバーラク・シャーがなくなって、ムバーラク・シャーの息子たちが 1279 年にヘラートに侵攻したアバガの下にいたりフラグ・ウルスに帰順し、アバガによってカラウナス=ニクダリヤーンの長に任命された。おそらくそれに対してカイドゥの側は亡命したムバーラク・シャーの息子たちの後にチャガタイの長子ムワトウケンの曾孫のアブド・アッラーをその支配者に任じた。3) アブド・アッラーはドゥワによってドゥワの息子のクトウルグ・ホジャに交代させられるまでその地位にあった。交代の時期は、ラシードは②の記事で 698 (1298-99) 年としているが、ジャクソンは、イル・ハン国におけるいわゆる「ノウルーズの反乱」(1289~94) の最後にノウルーズ (モンケ・大ハン時代のホラサーン・マーザンダラーン総督アルゲン・アカの息子) が後にイル・ハンとなるガザン (在位 1295-1304) に降服した後のイル・ハン側の中央アジアへの侵攻に備えカイドゥ、ドゥワによる 5 テュメンの軍団配置が行われた 1294 年前後を想定している [Jackson 1999: 217-18]。この点については稿をあらためて論じることにしたい。

## 参考文献

『歴史集成』写本略号 (番号は大塚 2016: 58-59 リストによる)

### 第 I 巻写本

2. イスタンブル写本: Topkapı Sarayı Müzesi Kütüphanesi, Istanbul, MS. Rewān köşkü 1518 (1317 年書写)
4. タシュケント写本: Abu Rayhon Beruni Institute of Oriental Studies, Tashkent, MS. CBP 1620 (14 世紀)
5. ロンドン 16688 写本: British Library, London, MS. Or. Add. 16688 (14 世紀)
8. ランプル写本: Raza Library, Rampur, MS. F. 1820 (14 世紀)
9. パリ 1113 写本: Bibliothèque National, Paris, MS. Supplément persan 1113 (15 世紀前半)
10. パリ 209 写本: Bibliothèque National, Paris, MS. Supplément persan 209 (1434 年)

15. ミュンヘン写本：Bavarian State Library, Munich, MS. Cod. Pers. 207/2 (1546年)  
 16. サントベテルブルク D66 写本：Institute of Oriental Manuscripts, St. Petersburg, MS. D66 (1576年)

第 I 卷・第 II 卷合本写本

56. サントベテルブルク PNS46 写本：National Library of Russia, St. Petersburg, MS. PNS46 (1407年)

ハーフィズ・アブルー『撰集 (*Majmū'a-yi Ḥāfiẓ Abrū*)』写本

イスタンブル 282 写本：Topkapı Sarayı Müzesi Kütüphanesi, Istanbul, MS. Bağdad köşkü 282.

『元史』：『百衲本二十四史 元史 (明洪武刊本)』(一)～(四), 台湾商務印書館。

JT (Rowshan & Mūsawī) : Rashīd al-Dīn Faḍl Allāh, *Jāmi' al-Tawārikh*, 4 jild, ed. Muḥammad Rowshan and Muṣṭafā Mūsawī. Tehran, 1373.

JT (Rampur) : Rasheeduddin Fazlullah Hamedani, *Jamiut Tawarikh*. Rampur Raza Library, 2015.

JT/II (Али-заде) : Фазлуллах Рашид-ад-дин, *Джами-ат-таварих*, том 2, Часть 1, Критический текст, Абдул-Керим Али Оглы Али-заде. Москва, 1980.

JT/II (Blochet) : *Djami el-Tévarikh : Histoire générale du monde par Fadl Allah Rashid ed-Din*, Vol. II, ed. by Edgar Blochet, GMS Series XVIII. Leiden · London, 1911.

JT/II (Верховский) : Рашид-ад-дин, *Сборник летописей*, Том II, Ю. П. Верховский (перевод). Москва-Ленинград, 1960.

JT/III (Али-заде) : Фазлуллах Рашид-ад-дин, *Джами-ат-таварих*, том 3, Составитель научно-критического текста на персидском языке Абдул-Керим Али Оглы Али-заде. Баку, 1957.

MASHa : Anonym, *Mu'izz al-Ansāb fī Shajarat al-Ansāb*. MS. Bibliothèque Nationale, Ancien fonds persan 67.

MŞ (Бартольд) : Jamāl al-Qarshī, *Mulḥaqāt al-Şurāh*. In: В. В. Бартольд, *Туркестан в эпоху монгольского нашествия*. СПб, 1898-1900, т. I (тексты), стр. 128-52.

MŞ (2005) : Jamāl al-Qarshī, *Mulḥaqāt bi-ş-Şurāh*, ed. (with facsimile) by Ш. Х. Вохидов и Б. Б. Аминова. Алматы, 2005

MTM : Mu'in al-Dīn Naṭanzī, *Muntakhab al-Tawārikh-i Mu'inī*, ed. by Jean Aubin. Tehran, 1957.

NQ : Hamd Allāh Mustawfī Qazwinī, *Nuzhat al-Qulūb*, vol. 1, ed. by Guy Le Strange. GMS Series XXIII, Leiden · London, 1915.

S'U : Nāṣir al-Dīn Munshī Kirmānī, *Simt al-'Ulā li-l-Ḥaḍrat al-'Ulyā dar Tārikh-i Qarā-Khitā'iyān-i Kirmān*, ed. 'Abbās Iqbāl. Tehran, 1328Sh./1949.

ShP : Anonym, *Shu'ab-i Panjgāna*. Topkapı Sarayı Müzesi, MS. No. 1937.

TJ (tx. 1~3) : 'Alā' al-Dīn 'Atā'-Malik Juvainī, *Tārikh-i Jahāngushāy*, ed. by Mirzā Muahmmad Qazvinī, vol. 1-3. London, 1912, 1916, 1937.

TJ (Boyle) : 'Ala-ad-Din 'Ata-Malik Juvaini, *The History of the World-Conqueror*, tr. by John

- Andrew Boyle, vol. 1-2. Manchester, 1958.
- TShQ: Anonym, *Ta'rikh-i Shāhī-yi Qarā Khitā'īyyān*, ed. M. I. Bāstānī Pārīzī. Tehran, 1976-77.
- TTW: Shihāb al-Dīn 'Abd Allāh Sharaf Shīrāzī, *Tahrīr-i Tārīkh-i Waṣṣāf*, by 'Abd al-Muḥammad Āyatī, 2nd chap. Tehran, 1362.
- TU: Abū al-Qāsim 'Abd Allāh b. Muḥammad al-Qāshānī, *Tārīkh-i Ūljāytū*, ed. by Mahin Hambly. Tehran, 1969.
- TW: Shihāb al-Dīn 'Abd Allāh Sharaf Shīrāzī, *Tārīkh-i Waṣṣāf al-Ḥaḍrat*. Bombay, 1853 (rep. Tehran, 1959).
- Aubin, Jean (1969) L'ethnogenèse des Qaraunas. *Turcica* I, 65-94.
- Barthold, Vasiliĭ Vladimirovich (1928) *Turkestan down to the Mongol Invasion*, GMS New Series V, 4<sup>th</sup> ed. London, 1977.
- Barthold, V. V. (1956) *Four Studies on the History of Central Asia, Vol. I, 1. A Short History of Turkestan, 2. History of Smirechyé*, tr. by V. & T. Minorsky. Leiden.
- Biran, Michal (1997) *Qaidu and the Rise of the Independent Mongol State in Central Asia*. Richmond.
- Bosworth, Clifford Edmund (1994) *The History of the Saffarids of Sistan and the Maliks of Nimruz (247/861 to 949/1542-3)*. California · New York.
- Bregel, Yuri (2003) *An Historical Atlas of Central Asia*. Leiden · Boston.
- Jackson, Peter (1978) The Dissolution of the Mongol Empire. *CAJ* 22, 186-243.
- Jackson, Peter (1999) *The Delhi Sultanate: A Political and Military History*. Cambridge.
- Quinn, Sholeh A. (1989) The *Mu'izz al-Ansāb* and *Shu'ab-i Panjgānah* as Sources for the Chaghatayid Period of History: A Comparative Analysis. *Journal of Asian History*, 33 (3-4), 229-253.
- Woods, John E. (1987) The Rise of Timūrid Historiography. *JNES* 46 (2), 81-108.
- 岩武昭男 (1994) ラシードウディーンの著作活動に関する近年の研究動向『西南アジア研究』40, 55-72.
- 岩武昭男 (1997) ラシード著作全集の編纂 ——『ワッサーフ史』著者自筆写本の記述より ——『東洋学報』78 (4), 1-31.
- 宇野伸浩 (2003) ラシード・ウッディーン『集史』の増補加筆のプロセス『人間環境学研究』1 (1・2), 39-62.
- 宇野伸浩 (2006) ラシード・ウッディーン『集史』第1巻「モンゴル史」の諸写本に見られる脱落『人間環境学研究』5 (1), 95-113.
- 宇野宇野 (2011) 第1巻「モンゴル史」の校訂テキストをめぐる諸問題 吉田順一監修・早稲田大学モンゴル研究所編『モンゴル史研究 ——現状と展望 ——』明石書店, 44-64.
- 宇野伸浩 (2012)『集史』第1巻「モンゴル史」の諸写本におけるチャガタイ・カンの息子達の順序の混乱『人間環境学研究』10, 173-186.
- 大塚 修 (2014) 史上初の世界史家カーシャニー ——『集史』編纂に関する新見解 ——『西南ア

- ジア研究』80, 25-48.
- 大塚 修 (2015) ハーフィズ・アブラーの歴史編纂事業再考 ——『改訂版集史』を中心に——『東洋文化研究所紀要』168, 245-289.
- 大塚 修 (2016a) 『集史』第2巻「世界史」校訂の諸問題 ——モハンマド・ロウシャンの校訂本に対する批判的検討を中心に——『アジア・アフリカ言語文化研究』91, 41-61.
- 大塚 修 (2016b) 『集史』の伝承と受容の歴史 ——モンゴル史から世界史へ——『東洋史研究』75 (2), 347-312 (逆頁).
- 川本正知 (2010) モンゴル帝国における戦争 ——遊牧民の部族・軍隊・国家とその定住民支配——『アジア・アフリカ言語文化研究』80, 113-151.
- 川本正知 (2012) バハー・ウッディーン・ナクシュバンドの生涯とチャガタイ・ハン国の終焉『東洋史研究』70 (4), 768-738.
- 川本正知 (2013) 『モンゴル帝国の軍隊と戦争』山川出版社.
- 川本正知 (2015) カラウナスとチャガタイ・ハン国『歴史と地理』681 (世界史の研究 242), 1-16.
- 北川誠一 (1980) ニクダリヤーンの成立『オリент』22 (2), 39-55.
- 北川誠一 (1981) イル＝ハンとニクダリヤーン『イスラム世界』18, 1-18.
- 佐口 透 (1942) チャガタイ・ハンとその時代 (上) ——十三, 十四世紀トルケスタン史序説として——『東洋学報』29 (1), 78-119.
- 志茂碩敏 (1995) 『モンゴル帝国史研究序説』東京大学出版会.
- 白岩一彦 (1993) 『集史』テヘラン写本 (イラン国民議会図書館写本 2294) について『オリент』36 (1), 55-70.
- 白岩一彦 (1998) ラシード・ウッディーン『歴史集成』イラン国民議会図書館写本の成立年代について『オリент』40 (2), 85-102.
- 杉山正明 (1978) モンゴル帝国の原像『東洋史研究』37 (1), 1-34.
- 本田實信 (1991) 『モンゴル時代史研究』東京大学出版会.
- 村岡 倫 (1988) カイドゥと中央アジア ——タラスのクリルタイをめぐる——『東洋史苑』30・31, 175-205.
- 矢島洋一 (2008) ラシードウッディーン『中国史』近刊刊本二種『イスラーム世界研究』2 (1), 271-78.

(京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科)